始

欠

50-132

らうといふには拙著「家庭醫學」を讀まれたい。換言すれば家庭醫學と本書と兩々相待つて完全するのである。

曩に「通俗處方全集」といふを著したが、其の本の形が大きくて携帶上不便であるといふ讀者からの注意もあつたから之をポケット形にしようでは無いかと相談してる中に、其の本屋は廢業して了つた。で今般金刺芳流堂書店主と相諮り、小形にしたるのみならず、處々訂正し、且つ日本藥局方便覽、新舊病名對照表等を附錄としたのである。

欠

處方の組立は泰西の諸書、我國の醫科大學に行つてる物の見聞及び其の他の諸大家に倣つたので、自分一己の組立は殆ど無いと言つても差支無いが、併し分量上に於ては日本藥局方を根據にしてある。

内科の篇には色々の談話を交へてあるのは、主に自分が出逢つた實話に幾分色艶を附けたものである。

處方の藥名下に(劇)(毒)の文字あるのは勿論劇藥毒藥の標何も無きは普通藥である。劇藥・毒藥は素人の買はれぬ藥、されば素人が之を應用しようといふには無標の物を撰ばね

ばなりませぬ。救急或は旅行中等で醫士の間に合はぬ場合に無標を應用せらるゝは差支無けれど、一切醫士に罹らずに唯手前療治を押通す材料に供へられるに至つては著者は泣きます。之に反して開業醫士が「これア都合の宜い本だ」として藥籠中の物とせられるに至つては著者の喜び之に過ぎたる事はありませぬ。

畢竟ずるに本書は家庭用の三字を冠せてあるけれど、唯了り易いといふまでゝ其の實は素人四分、黑人六分位の用に立つと信じてゐるのです。

緒言

淺學不文の著者故定めし誤謬も多からうと思ふ、そは又追々識者の高敎を得て訂正する積りである。

時維大正三年一月二十九日の朝凍れる筆を呵しつゝ

著者識す

ポケット家庭用 處方と調劑術目次

調劑術の部

調劑術に就て……一
如何なる器械が要るか……二
秤量器……二
重量の事……三
處方箋……八
水劑……一〇
越幾斯類の水劑……一一
樹脂を含んでる酒精液の水劑……一二
キニーネ鹽の水劑……一三
振盪水劑……一三
飽和劑……一三
浸劑と煎劑……一四
普通一般の水劑……一八
冷浸劑……一九
茶劑(又剉劑)……一九
乳劑……二〇
樟腦乳劑……二一
燐乳劑……二一
散劑……二一
揮發油の散劑……二六

特別散劑……二三
樟腦散劑……二六
麝香の散劑……二六
丸劑の目的要素製法等……二七
特別の丸劑……三一
錠劑……三二
舐劑(又煉劑)……三三
點眼劑……三四
注入劑……三四
注射劑……三四
含嗽劑……三五
洗滌劑……三五
灌腸劑……三五
坐劑……三六
小兒老人の藥量……三七
含嗽洗口法……三九

處方の部

神經系病篇

神經衰弱症……四〇
獸私的里……四九
腦充血……五六
腦卒中……
腦貧血……
脊髓痨……
依卜昆埡兒……
神經痛……
偏頭痛……

癲癇……九二
顏面神經痲痺……九七
常習頭痛……九九
書痙……一〇六
橫隔膜痙攣……一〇七
神經系病處方一束……一一〇

消化器病篇

胃痛……一二七
急性胃加太兒……一三〇
慢性胃加太兒……一三二
慢性消化不良……一三四
胃擴張……一三六
胃潰瘍……一三七
腸加太兒……一四一
便秘……一四五
盲腸炎……一五〇
痔疾……一五一
條蟲……一五三
蛔蟲……一五七
十二指腸蟲……一五九
急性腹膜炎……一六一
慢性及結核性腹膜炎……一六三
肝臟充血……一六六
黃胆……一六九
消化器病處方一束……一七一

呼吸器病篇

感冒……一九〇
氣管支加太兒……一九三

慢性氣管支加太兒……一九七
肋膜炎……一九九
肺結核……二〇四
肺炎……二二九
呼吸器病處方一束……二三二

傳染病篇

インフルエンザ……二四九
赤痢病……二五四
虎列刺病……二六四
腸室扶斯……二七五
犬毒狂水病……二八三
痘瘡……二八六
種痘法（附則）……二九一
種痘法施行規則（附則）……二九六
種痘施行心得……三〇一
間歇熱……三〇四
解熱發汗處方一束……三一一

運動器病及體質病篇

急性關節僂麻質斯……三一九
慢性關節僂麻質斯及畸形性關節炎等筋肉僂麻質斯……三二一
痛風……三二一
糖尿病……三三七
貧血病……三四六
强壯劑處方一束……三五一

內科雜病篇

流涎症……三六三
痲痛……三六四

喘息……三六六
心臟內膜炎……三六九
心臟瓣膜病……三七一
神經性心悸亢進……三七三
腎臟實質炎……三七五
膀胱加太兒……三七九
膀胱麻痺……三八〇
內科雜病處方一束……三八二

皮膚病篇

禿頭病……三九八
不毛症……四〇〇
白髮症……四〇二
贅毛症……四〇四
濕疹……四〇六
酒齄鼻……四〇九
火傷……四一〇
凍瘡……四一三
皮脂漏……四一五
面皰……四一六
多汗症……四一七
疥癬……四二一
頭蝨……四二三
毛虱……四二四
白癬……四二五
癜風……四二七
癩病……四二八
蕁麻疹……四三一

母斑……四三五
雀斑……四三六
胼胝……四三七
雞眼……四三七
疣贅……四三八
飛火……四三九
紅斑……四四〇
皮膚病處方一束……四四〇

小兒病篇

臍炎……四五一
初生兒及乳兒の消化不良……四五一
口粘膜加太兒……四五五
鵞口瘡……四五六
小兒急癇……四五七
夜驚睡怖……四五九
腦脊髓膜炎……四六〇
痲疹……四六二
百日咳……四六五
遺尿……四六八
腺病……四六九
小兒吐瀉症……四七一
小兒痩削症……四七三

生殖器病篇

陰萎……四七五
遺精……四七九
女子外陰部炎症……四八二
急性腟炎……四八四
慢性腟炎……四八四

子宮內膜炎……四八七
痳疾……四八九
軟下疳……四九二
梅毒……四九四
生殖器病處方一束……四九七

雜科病篇

トラホーム……五〇五
夜盲……五〇九
角膜軟化症……五一〇
膿漏性結膜炎……五一二
眼瞼炎……五一五
バセドー氏病……五一六
外聽道炎……五二一
急性鼻加太兒……五二五
急性化膿性鼻炎……五二九
慢性鼻加太兒……五三〇
悪臭性痩削性鼻炎……五三二
昆蟲螫創……五三四
毒蛇咬傷……五三四
乳癌……五三五
乳汁分泌過多……五三六
乳汁分沁減少……五三六
產婦急癇……五三七
中毒病……五三八
扁桃腺炎……五四五
瘰疬……五四七

目次終

陣痛微弱……五四八
流産……五四八
齒痛……五四九
學瘡……五五〇
膝關節炎……五五一
鼻出血……五五二
船暈症……五五三
動脈瘤……五五四
＊＊＊＊
附錄
新舊病名參考……五七五
日本藥局方便覽……五九一

ポケット家庭用

處方と調劑術

調劑術の部

糸左近著

處方を應用せんとするには是非共其の以前に調劑術を心得てかゝらねばならぬ、故に開卷眞先に劑調術より述べることにしたのである。

調劑術に就いて——調劑術を本當に解釋すると藥劑師が醫士の處方箋に據つて藥物を調合し、之を患者に授ける所の技術を云ふのである。所が我が國では大抵醫士自己で調劑してゐるし、又素人が救急等の場合に自ら調製することも稀で無い。故に之より左に藥劑師ならざる人の調劑するを目的として述べる、換言すれば完全なる正式の調合法では無くて、自家用の簡易なる變則の調合術を說くのだ。然れど書いてある通りに

調合すれば決して危險を招くやうなことか無い。

如何なる器械が要るか——正式に備へ附けるには中々容易で無い。

普通には机、秤量器、液量器、煎劑器、丸劑器、熱湯斗、乳鉢、乳棒、匙、篦、膏藥板等であつて、附屬品としては藥包紙、瓶、曲物等である。斯くて素人用には此の中でも亦略式、即ち簡單なる變則にやることが出來る。そは追々左に述べよう。

秤量器——藥劑師が必要なる秤量器は幾つも要るし、又少くも一ミリグラムといふ少量を秤られる物を有つてゐればならぬけれど、實際其程完全で無くても可い。殊に素人は劇毒藥を取り扱ふことが無いから、斯る少量を秤る必要は勿論無のである。されば普通醫士に於ては皿秤と手秤（一センチグラムより二瓦までグラム秤られる位の物）十瓦のメートルコップ・二百瓦位の熱湯斗及び滴量器があれば大抵間に合ふ。乃で素人は皿秤も

斯くて手秤等を取扱ふには乾いた布片を以て拭ひ、可成塵埃を避けて仕舞置かねばならぬ。濕れてゐたり垢や他の藥品が著いてゐたりすると、精密に秤られぬは言ふまでも無く、害を及ぼすことがある。

重量の事——我が國では從來何兩何匁何分といふやうに秤つたものであるが、日本藥局方を制定せられてからは悉く「グラム量」を以て藥物を秤ることになつた。「グラム」とは攝氏四度の水一立方センチメートルを以て其の原位即ち「一グラム」とし十グラムをデカグラム、百グラムを一ヘクトグラムと云ひ、十分の一グラムを一デシグラム、百分の一グラムを一センチグラム、千分の一グラムを一ミリグラムと云ふ。之を數字に表はすには左の如し。

一・〇	一	三・五	三
一・五	一	五	半
	五	半	
		三五・〇	三十五
			五

一〇・〇	デカ瓦即十瓦	五〇・五	五十瓦半
一〇〇・〇	ヘクト瓦即百瓦	三七〇・〇	三百七十瓦
〇・二	二デシ瓦	〇・六	六デシ瓦
〇・〇六	六センチ瓦	〇・〇九	九センチ瓦
〇・〇〇一	一ミリ瓦	〇・〇〇七	七ミリ瓦
三・〇	三瓦	〇・一〇五	一デシミリ瓦

等の如し。

之を我が國の量目に換算せんとするには、十五分の四を乘ずるのだ。即ち四を乘じ、十五で割れば可い。例へば十五グラムは四匁となるやうなものだ。

$$15\text{グラム} \times \frac{4}{15} = 15 \times 4 \div 15 = 4$$

粉末狀の物や葉狀の物等、即ち固形體は皿秤或は手秤で秤られるけれど、液體の物は天秤で一々秤るのは甚だ不便である。故に普通にはメートルコップで秤つてゐるのだ。併し水と比重を同じくするものなら、それで可いが水と比重を同じくせぬ物は不精密になる、されば左の表を標準にし、以てメートルコップで秤つたら大抵精密に近いものである。

硫酸	十滴	杏仁水	十六滴
鹽酸	十二滴	ペルーバルサム	十六滴
硝酸	十二滴	燐酸	十六滴
過クロール鐵液	十二滴	稀硫酸	十六滴
舍利別類	十二滴	醋酸	十六滴
鉛醋	十六滴	亞砒酸カリウム液（ホーレル水）	十六滴
稀鹽酸	十六滴	コパイババルサム	二十滴
水	十六滴		

クレオソート　二十滴
桂皮油　二十滴
巴豆油　二十滴
オレーフ油　二十滴
揮發苦扁桃油　二十滴
丁香油　二十滴
クロロフオルム　二十五滴
茴香油　二十五滴
杜松實油　二十五滴
薄荷油　二十五滴
薔薇油　二十五滴
拘櫞油　二十五滴

例へば杏仁水や燐酸は其の量が同じであるからメートルコップで燐酸や

橙花油　二十五滴
ベルガモット油　二十五滴
カヤプチ油　二十五滴
サビナ油　二十五滴
エーテル酒精製丁幾類　二十五滴
酒精製丁幾類　二十五滴
エーテル精　二十五滴
稀酒精　二十五滴
エーテル精　二十五滴
甘硝石精　三十滴
酒精　三十滴

杏仁水を一瓦の劃度してある所まで注げば一瓦になるけれど、鹽酸や硝酸は一瓦の劃度まで入れると一瓦餘、即ち一・六グラムになるし、甘硝石精や酒精はメートルコップの一瓦の劃度では〇・五三三強となるやうな道理である。故に此の道理を計算して量られたい。尚序に滴の事を言つておくが、處方に何滴とあるのを目分量で、ポタリ〳〵落すは、これ亦不精密になるから、之は滴數器を用ひられたいものである。滴數器は左圖の如し。

第一圖

第二圖

次に外用の目的殊に點眼に對しては第二圖に示すが如き器械を用ふ。これ

は藥液を瓶に盛り、其の栓として挿んである管を少し抽き出し、其のゴムを貼つてある部を指で壓して直に其の指を去れば管の下なる尖つた端から液體を吸ひ入れる。斯くて此の管を全く抽き出し、患部例へば眼の上に持ち行き（頭を後方に反すやうにして）再び指でゴムの上を輕く壓せばポタリ〳〵と一滴宛落ち下るものだ。

處方箋――處方箋とは醫士から患者に與へる藥の方書である。此の處方箋には次の如き條件を備へておかればならぬ。

（一）患者の氏名年齡
（二）處方
（三）藥名及び其の分量
（四）調製法及び服用法
（五）年月日

（六）醫士の署名及び捺印

醫士自ら調劑し、處方箋を患者に渡さぬ場合に於ても處方錄には（六）を除くの外は可成之を記し尚發病年月日から原因・病狀・經過及び其の他醫療上參考となる可き事柄は綿密に記し、啻に醫士自己のみならず、誰かが見ても成程と思はれるやう記しておくが正當である。尚雜形を示せば下の如くであるが、醫士自ら調劑する場合

處方箋

患者　何某殿
何年何月生或は何年何ヶ月

處方
重炭酸ナトリーム　三・〇
苦味丁幾　二・〇
單舍利別　一〇・〇
水　二〇〇・〇
右一日三回二月分服

大正　年　月　日

醫士　何某　㊞

には此の處方箋を患者に渡す必要は勿論無い。されど醫士が調劑せぬ場合は之を患者に渡すか、或は直に藥劑師に渡し、藥劑師が之を調劑して其の藥劑を患者に渡すからである、何れにしても調劑が出來れば其の藥劑の容器又は包み紙には處方箋に依つて內・外用の別、用法、用量、年月日、患者の氏名、藥局地及び藥劑師の氏名を記して之を患者に與へるのである。

水劑——二味以上の藥物を水液中に相混じたものを總稱して溶液合劑といふ。此の種に用ふる藥物は水に溶解する所の諸種の鹽類越幾斯類丁幾類其の他舍利別類などである。而して賦形水は大抵常水又は蒸餾水を用ふ。世の所謂水藥と稱するものは即ち之である。凡そ水劑を製するに當つて如何なる順序に依るを一般の法則とするかといふに、先づ最初に少量の藥物から順次多量のものを秤るやうにせねばならぬ。何ぜといふに、通常少量の物は其の藥劑中の主効をなすもので、亦劇藥や毒

藥の配伍せられたものが多い、隨つて秤量は正確の上にも正確を期せねばならぬ。最初より多量の物を秤るときは、どうしても秤量器の感動を害するの恐れがあるからだ、斯くの如くにして配伍藥の全部を秤り混合したときは能く振り盪かし、全く溶けたか否かを確めた上、若し異物があつたら之を濾過した後、壓栓器を用ひて柔げた木栓で密閉するのである。

越幾斯類の水劑——此等の合劑を爲すに當つては、其の越幾斯が乾燥製であれば直に之を有口乳鉢に秤り取り、能く細粉にした後、少量の水を滴加して舍利別程の稠度になし、後次第に殘りの水を加へて稀薄くし、之を合劑瓶に移すのであるが、若し其の越幾斯が乾燥製で無かつたら、先づ越幾斯篦でパラフイン紙上に秤り取り之を注意して乳棒の尖端に附著せしめ、而して少量の水を滴加して研り和せ、矢張舍利別の稠さにし、前法の如く調劑するのである。併し流動越幾斯に在つては右何れの法にも依らず、直に一般の水劑と同じい方法に依つて調製することが出來る。

樹脂を含んでゐ酒精液の水劑——例へば印度人麻丁幾・癒瘡木丁幾などの合劑に在つて、其の配伍藥中に舍利別を含んでるとせば、先づ有孔乳鉢に採つて右の兩者を能く研り和ぜた後徐々に水を注ぎ、之を合劑瓶に移すのであるが若し舍利別の配伍が無い場合には全體の水を振盪しつゝ、其の丁幾を滴一滴と滴出すのである。又併し著るしく樹脂を含んでゐて、前法の通り行つても尙樹脂實が浮かんで均同の混和液にならぬ場合には、其の藥物を等分のアラビアゴム末を採り、之と共に乳鉢内で能く研ぎ和ぜ、次第に水を注ぎ入れて混和せしむるのである。

キニーネ鹽の水劑——之は其の鹽類の溶けるか否かに注意するのであつて、乃ち酸類の配伍があれば容易に溶解するものなれど處方箋中に若し此等の記載が無いときはキニーネ鹽と同量乃至其れ以下の稀鹽酸又は稀硫酸を配伍するのが通常である。

振盪水劑——之は溶けぬ藥、又は溶け難い藥を水劑にするのであつて、

其の調劑方法は、右の藥物を有口乳鉢内で能く研り和ぜ、即ち初め水の少量を注ぎ、次に殘餘の水を加へて漸次稀薄くし、之を投藥瓶に移すのである。併し之は暫時間經つと、溶けぬ分は悉く沈澱するは言ふまでも無いから、服む折には一々之を振り盪かさねばならぬ、これ即ち此の名の起つた所以である。

飽和劑——之は炭酸鹽類と酸類とを中和したる一種の水劑である。其の調製法は先づ器中に炭酸鹽類を秤り、成る可く多量の水藥中に溶解し然る後、液狀乃至は細粉とした所の酸類を徐々に加へて中和せしむるのである。斯くて本劑の目的は、多くは遊離炭酸を主とするのであるから、其の調製に當つて炭酸の逃げぬやうに注意をせねばならぬ。今尙處方例に依つて說明しよう。

酒石酸　處方

重炭酸ナトリウム	二・二
單舍利別	二〇・〇
水	二〇〇・〇

右一日數回適宜分服

之を調製するには、先づ重炭酸ナトリウムを秤つて之を水劑瓶に容れ、次に單舍利別を取り、更に注意して水を加へ、之に酒石酸を細末にしたものを投ずるのである。斯の如くするときは徐々に中和するに隨つて遊離炭酸の逃げるを防ぐことが出來るのである。

浸劑と煎劑——共に水劑の一種であつて、生藥類の溶ける成分を重湯煎の溫を藉つて水に浸出したものである。(重湯煎とは畢竟湯氣で煎するのである)所で如何なる物を浸劑とし及び煎劑とするかといふに浸劑に、屬するものは容易に其の有効成分の溶ける藥物(例へばヂギタリス葉、吐根等の如し)で煎劑に屬するものは、長い時間、溫浸せれば容易に其の

有効成分の溶けぬ藥物(例へばコロンボ根・キナ皮等の如し)である。尙今、二劑の調劑を說くに當り日本藥局方の文を揭げて掛らう。

浸劑を製するには之に供用する藥物を必要の場合には細切し、沸湯を注ぎ、時々振盪しつゝ五分時間重湯煎上に置き、冷後漉過す可し處方箋中、藥物の分量を記載せざる時は、藥物一分に付き十分の漉液を得べき液量を取る可し。劇藥に屬する藥物に於ては醫士必ず其の分量を記載す可し。

煎劑を製するには、之に供用する藥物を必要の場合には細切し、水を注ぎ時々振盪しつゝ三十分時間重湯煎上に熱し、溫に乘じて壓漉す可し。處方箋中藥物の分量を記載せざるときは、藥物一分に付き十分の漉液を得可き液量を取る可し。劇藥に屬する藥物に於ては醫士必ず其の分量を記す可し。又多量の粘液質を含有する藥物に於ては、藥劑師は必ず其の分量を記載す可し。

右に示す所に依つて劑の區別を立て、見ると浸劑に在つては沸湯を用ひ、五分時間、溫浸し冷却するを待つて漉壓する、煎劑に在つては冷水を用ひ、三十分時間溫浸し、熱に乘じて壓漉する。との差があるのみである。乃で此の浸煎劑は圖の如き器械を用ひて調製するのである。第三圖の内面には液の分量を示す所の線を劃したる錫製又は陶器製の鍋を載せてある。即ちIは酒精燈を以て煮るので、IIは二つの鍋を小さな石油燈の竈の上に置て在のだ。是で一定の時間煮

第三圖

たる液は綿布又は亞麻布製濾布で漉し、尚濁つてゐたら更に目の細かい物で漉すが宜い。而し之を素人的に行ふには、藥物を成可細かにし、之を土瓶の中に入れ、沸湯を注ぎ、右の時間だけ煎じ、絹篩で漉せば出來るのであ

る。素人のみならず醫家に於ても此の素人術を用ひてる人が稀で無い。今其の處方例を示せば、

1 處方

吐根浸 (〇・二)一〇〇・〇
杏仁水 四・〇
單舍利別 八・〇
右一日三回分服

2 處方

機那皮煎 (四・〇)一〇〇・〇
稀鹽酸 一・〇
單舍利別 八・〇
右一日三回分服

右1は吐根を括弧内の分量即ち二デシ瓦を秤つて可成均等に細かに切り、之を土瓶の中に入れ、沸湯百瓦を注ぎ、五分時間煎じ、之を絹篩で濾し、之に杏仁水四瓦と、單舍八瓦とを加へ其の總量が百瓦無いときは、それだけ水を注ぎて全量百瓦とし、之を一日三回に分服するのである。2は機那皮を矢張括弧内の分量だけ秤り、之を土瓶の中に入れ、更に稀鹽酸

一瓦を加へ、斯くて沸湯を注いで三十分時間煎じ、煎じたる後の處置は同じである。序に言つておくが機那皮は酸類を加へて煎ずると、其の有効成分が多く浸出せられるから、それで初めより稀鹽酸を加へて煎ずるのである。又一つ注意す可きは、煎じてゐる中に湯が無くなり、藥が焦げ附くやうなことがあつたら、前以て少し宛湯を加へるが必要である。

普通一般の水劑——水劑に就いて一つ言つておく可き注意がある。それは何かといふに、處方中、水一〇〇・〇と有つても必ずしも一〇〇・〇で無いのが今日我が國に行はれてる普通一般の狀態である一事だ。之も左の處方例に依つて、説明しよう。

處方

含糖ペプシン	三・〇	單舍
稀鹽酸	一・〇	八・〇
水		一〇〇・〇

右一日三回分服

此の處方通りに調製すれば、全體で一一二・〇となる譯だが、實際に於て

は含糖ペプシン三瓦と、稀鹽酸一瓦と單舍八瓦とを混じ、之に水を注ぎ、全體の溶液が、水の百瓦の嵩になるだけ水を加へることになつてゐる。西洋では一食匙一茶匙といふやうに、食匙や茶匙が一つの液量器になつてるから、それで量つて服めば差支は無いけれど、我國ではそれが無いから、投藥瓶に條が附いてゐて、三回なり六回なりに分服すれば都合の宜いやうにしてあるのだ。併し中には全量で水の一〇〇・〇の嵩にせぬのも稀にはある。乃ち杓子定規で行れぬのもあることを忘れてはならぬ。

冷浸劑——之を製するには、之に用ふる所の藥物を秤り、之を水又は酒、或は醋などを以て特別の記載あるものゝ外は、常溫で時々振蕩しながら一日間浸出して製するのである。

茶劑（又剉劑）——茶劑は稀に用ふる調劑で、即ち漢方醫の常用藥たる所の草根・木皮・葉・花・種子等を細かに剉き、毎服量を紙片に包むか、又は全量を藥袋に容れて、患者に與ふるのである之を患者自ら浸出又

は煎出して服用するのであるから、茲に用ふる所の藥物は多くは劇毒性な有せぬ生藥類を用ふるのが常である。本劑にも亦單複の二種がある。次に兩者の處方例を示しておかう。

單一茶劑の處方例

カミルレ花　一〇・〇

右細刻茶劑となし投與

複雜茶劑の處方例

杜松實
茴香
甘草末　各二・〇

右茶劑となし二回に服用

乳劑——之も一種の水劑である。其の製法は卵黄・ゴム質或は糊い乳汁の媒介で水と油質とを密に混和して之を其の液中に均等に分布せしめるのである。而して此の乳劑を分つて二種となす、曰く眞性乳劑、曰く假性乳劑である。眞性乳劑は又種子乳劑とも稱し、油質とゴム質とを含んでる所の植物の種子を碎き磨つて水と混ぜるものを云ひ、假性乳劑は油類等をゴム末或は糊い乳汁の媒介で水と密に和ぜ製へるのを云ふのである。

樟腦乳劑——本劑を製方するには、藥物一分に就きアラビヤゴム末十分或は卵黄一個の割合で媒介物を採り、一般乳劑の法に依つて製するものである。但し樟腦を乳鉢に入れて細粉とするには、無水アルコールか或はエーテルの少量を滴し研るときは容易に其の目的を達することが出來る。

燐乳劑——本乳劑は頗る注意を要す可きもので元來燐素を取り扱ふには、一々ピンセットを以て挾み、決して手指を直に接けてはならぬ。從來種々の製法はあるが、最も其の當を得たのは、燐を脂肪油に溶解して後、油乳劑の法に依つて乳化するのである。

散劑——散劑とは乾燥した藥物を粉狀にしたものを混合するのである。之を製するには、口の無い乳鉢の中に藥物を入れ、乳棒を以て輪狀に研るのだ。乃で藥物の種類に依り、一樣に言ふことは出來ぬが、始め二三十回にして乳鉢の周壁並に乳鉢に着いてる藥を匙で搔き集め、後更に二十回位研れば充分に混和する事が出來るものだ。其の混合の順序は、水劑と

は全く反對に、大量の物を先に入れるやうにすのだ。何となれば、常に其の効用の主なる少量の藥物を始めに乳鉢内で研ると、乳棒又は乳鉢の周壁に着く恐れがあるからだ。故に少量の藥物は、初めに秤つておいても先づ量の多い方の藥の凡そ半量を乳鉢内に入れ、之を研つたる後、右少量の藥物を投じ、輕く研つて能く混ぜ、然る後、又殘る藥の半量を加へて更に能く研るのである。斯くて混ぜ終つた藥物は、處方箋に書いてある包數に分けねばならぬ。其の分ける方法は、散劑舟と稱する物を用ふるのが方式であるが、普通には目分量で分けてゐる。散劑の處方中、賦形藥即ち白糖とか乳糖とかを適宜と記載してあるのは、散劑一包の量につき〇・五位と心得れば可い。話變つて散劑には單複の二種ある。次に兩者の處方例を掲げて見よう。

單一散劑處方例

ドーフル氏散　〇・二

右一包と爲し臨臥頓服

複雜散劑處方例

ドーフル氏散　一・〇
次硝酸蒼鉛　三・〇
乳糖　一・〇
芳香散　〇・五

右分六包一日三回一包宛

乃で又一寸註しておく、それは何かといふに分六包一日三回一包とは、六包みに分けて一日三回に用ひ、一回に一包づゝ服むのであるから、六包は二日分といふことが丁るであらう。縱ひ「宛」といふ字が無くても、三回一包の下に「宛」があると心得られたい。

右は一般散劑に就いて述べたのであるが、尙散劑中、特別の技術と注意を要するものがある。即ち丁幾類散劑・越幾斯類散劑・揮發油散劑・樟腦散劑・麝香散劑・鹽類散劑・沸騰散の類である。左に順次記すことにする。

特別散劑——(一)丁幾類の散劑を劑するには、先づ其の含有する有効成分が揮發性であるか否かを確めた上、揮發性の物、例へば芳香阿片酒又は

復方キナ丁幾の類であつたら止むを得ぬから濕潤性の物を製して之をパラフヰン紙に包むのだ。若し又、揮發性の物で無く、例へば阿片丁幾の類であれば、乳鉢を湯氣で溫めるか、或は熱湯を注ぎ、暫時の後、之を傾けて其の水分を拭ひ、直に白糖なり乳糖なりの賦形藥の少量を投じ、輕く研り、其の上へ丁幾を滴し、研るときは其の乳鉢の溫度で丁幾の酒精分は揮散して能く乾燥し、粉末とすることが出來るものである。(二)越幾斯類の散劑は、乾燥性ならば直に調劑することが出來るけれど、軟稠製の越幾斯類にあつては、豫じめ乾燥越幾斯として置かねばならぬ。其の製法は、右軟稠の越幾斯に同量の甘草末を加へて重湯煎上で蒸發し、全く乾燥せしめた後、之を粉末とする。然る後秤つて逃げた水分の減失量に對するだけの甘草末を追加し、之を細粉とし、瓶中に密閉して貯へ、用に臨んで之を供用するのである。之が所謂、二倍用越幾斯と稱するものだ。茲に用ふる所の賦形藥には甘草末の外に、デキストリン或は乳糖を用ふる事は

あるが、引濕性の恐れがあるから甘草末に及ばぬのである。斯くて軟稠越幾斯の配位ある處方藥に接した場合には、右の法に依つて製した所の二倍用の越幾斯（假りに處方上蕓斯越幾斯〇・一とある時は二倍用越幾斯であるから其の倍量即ち〇・二を採るのである）を用ひて、他は一般散劑の法に從つて製方するのだ。今其の處方例を擧げて更に說明しよう。

處方

蕓木鼈越幾斯　〇・〇六
次硝酸蒼鉛　二・〇
重炭酸ナトリウム　三・〇
乳糖　一・五

右に於て、四藥を各別に秤り、其の中、重炭酸ナトリウム・次硝酸蒼鉛及び乳糖を其の大約、半量程を乳鉢に入れ、乳棒で研り交ぜ、然る後蕓木鼈越斯が乾燥製ならば直に加へて更に研るのであるが、若しトロ〳〵になつてゐたら之を乳棒の尖に悉く塗つて研け交ぜ、然る後、三藥の殘りを入れ、又更に能く〳〵研り交ぜるのである。

揮發油の散劑

——此等の藥品の配伍ある場合には、通常油糖を用ふるのである。日本藥局方の規定に依れば、油糖劑を製するには、白糖末五十分中揮發油一分を混有することになつてゐる。通常處方せらるゝ油糖劑の名稱を示せば、薄荷油糖・茴香油糖・橙皮油糖・絢縣油糖等の類である。ろして本劑の如き揮發油を含有する散劑は、凡てパラフヰン紙に包み、且廣口の硝子瓶に容れて與へるのである。

樟腦散劑

——本散劑も往々處方せられるものであるから、藥劑師や醫士は豫じめ之を細末として貯へておく必要がある。之を細末とするには、無水酒精或はエーテルの少量を滴し、口で吹きながら研るのだ。其の他は一般、散劑の法に則るのである。但し用に臨んで細末にしても勿論差支は無い。

麝香の散劑

——本散劑は至急を要すち場合に大抵調劑するのであるから、クニャ〳〵してゐて細粉にはなり難い。併し乳糖と研り和ぜれば稍其の

目的を達することが出來るから、所謂三倍用の麝香糖を豫じめ製しておくことが必要である、其の製法は、麝香一分と乳糖一分とを乳鉢内で能く研り混ぜ、之を篩過して其の殘つてる渣に更に乳糖一分を加へて前の如くにし、其の前後に得た物を合し、瓶中に密栓して貯へ、用に臨んで使用するのである。

丸劑の目的要素製法等

——本劑は大抵不快な臭味を有つてる藥物に對し、此の法を用ふるのである。乃で丸劑の具備要件としては、丸子に不同無く、圓く滑かで且軟か過ぎず硬過ぎず、各粒が互に附著かぬ事だ。而して一丸の重量は通常〇・一乃至〇・一五で、其の重量〇・二五乃至〇・五を有する物を大丸子或は巨丸と云ふ。次に丸劑は主藥・賦形藥・結合藥の三種からなつてるもので、主藥とは其の丸劑中の有効成分を云ひ、賦形藥とは無効或は補助の効を有するもの、結合藥とは右二者を適當の丸劑となすに必要なる粘い物質を云ふ。斯くて其の主藥に各處方に依つて各

各異るが、賦形藥は大抵、甘草末・アルテア根末・イリス根末・パン心などを用ふ。此の外、丸劑を調製する上に最も必要なるは越幾斯類で、即ち甘草越幾斯・甘草羔・龍膽越幾斯などは此の種の目的に最も賞用せらるゝものである。併し硝酸銀過マンガン酸カリウム等の如き有機性の物質に逢つて分解するものには、此等の賦形藥を用ふることが出來ぬから、此の場合には鑛物性の粉末即ち白陶土・滑石末などを用ふ。而して結合藥としてはアラビアゴム末・サレップ根末・トラガンタ澱粉などの濃い溶液・乃至グリセリン・砂糖水飴の類である。又賦形藥で結合藥を兼てる物もある。即ち越幾斯類・アルテア根末・パンジンの類だ。此の種の類で最も廣く用ひられる物は甘草越幾斯甘草羔である。斯樣に以上の三者を以て丸劑を製へることが出來るけれど、三者悉く粉狀の物である折は、必ず少量の液體が要るそれには通常グリセリン一分、蒸餾水二分の混和液から成つたものを用ひてゐる。茲にグリセリンを用ふる所以は、本品は常に溶け易い性を保つてゐ

て、時日が經つても丸劑粒の硬くなるのを防ぎ、且防腐の効力があるからだ。但し白陶土を用ふる場合は單に蒸餾水のみを用ひても可い。次に丸劑を製する法を說くに就いては、日本藥局法の規定から述べよう。曰く

丸藥を製するには最も親密に其の諸成分を混和す可し。賦形藥には通例、甘草越幾斯及び甘草末を用ひ揑合して適宜の丸劑塊とす可し。丸子は其の大さ均等なるを要し、一丸の重量は特別に記載するもの丶外は約〇・一グラムなる可し。丸衣には通例石松子末又は甘草細末を用ふ可し。

とある。此の注に從つて丸劑を製するには、初め必要な諸藥品を秤り、先づ賦形藥の少量を乳鉢内に入れ、研つた後、主藥を加へて更に研り次に殘りの賦形藥を入れて又能く研り、後結合藥を少量づゝ添へて充分に研り合せ、適當の丸劑の稠度を得たならは其の全量を秤つて、求むる所の丸子數に相當するやうに截るのである。乃て一定量の丸劑塊で、一定數の丸子、一定量の丸子を得ようとする場合には次の算式を用ふれば容

易く之を知ることが出來る。

丸子數＝丸劑塊の量／一丸の量　或は　丸劑塊の量＝丸子數／一丸の量

右の法に依つて丸劑塊を截つたもの、交互が粘着くのを防ぐために引濕性有せぬ物質を以て外皮を包まれねばならぬ。即ち所謂丸衣が必要である。上の丸衣は通常石松子末・甘草末を用ひ、時には桂皮末・イリス根末・カタクリ・澱粉・炭酸マグネシウム等を用ふることもある。昔は多く金銀箔を用ひたが、外觀の美を賞するの外、實用に於ては更に前者と撰ぶ所が無い。次に丸劑用器具は、截願器・展延板・成丸器などである。乃ち硝酸銀・醋酸鉛・昇汞などの如き他金屬に逢つて分解する物、或は酸類の丸劑には、截成器は勿論乳鉢・篦等、苟くも之に觸れる物は角製又は木製其の他磁製・硝子製の物を用ひねばならぬ。併し右は何れも完全なる製法であつて、素人が劇藥ならぬ物を一日分か二日分位の少數を製するに

は、賦形藥中に主藥を入れて能く混和し、之に飯粒を少し入れて又能く混ぜ一塊りとなし、之を目的の數に分け、手掌で丸め、甘草末に轉がせば簡單に出來るのである。

右に述べたのは一般の丸劑であるが、越幾斯類の丸劑・バルサム油類・エーテル製越幾斯類の丸劑等に在つては、又特別の技術が要る、左に一寸述べておかう。

特別の丸劑——越幾斯の丸劑には(イ)稀薄越幾斯(イ)稠厚越幾斯(ハ)乾燥越幾斯の三種ある。乃で其の用ふる所の越幾斯の種類に依つて賦形藥の分量が違ふ。(イ)に在つては凡て藥物に對する倍量の賦形藥を要し(ロ)に在つては凡そ半量(ハ)に在つては其の用ふる所の越幾斯の量が少量であれば適宜の賦形藥を要するが、若し多量なる場合は單に結合液のみで適當の稠度になるものである(二)バルサム油類エーテル製越幾斯類の丸劑には賦形藥として同量若くは半量の黃蠟を和ぜて適當の丸劑が出來る。

此の場合に植物粉末を用ふるときは其の多量を要し、從つて多數の丸劑とせねばならぬ不便がある。(三)燐の丸劑は燐の取扱ひ方に注意が要る。此の注意は乳劑の條で述べた通りであるから重ねて記さぬが、兎に角水劑を捏り合せる際は、可成顏を外方へ向けて發臭を避けねばならぬ。且其の技術は可成迅速で無いと燐を永く大氣に直接せしめ、爲に其の酸化を大ならしむるものだ。(四)石鹼の丸劑を調製する場合には、丸劑塊は始め疏なる稠度で宜い、其の譯は十分に捏り合せると次第に軟稠となるものであるから、始めより結合藥の多量を用ひぬやう注意せねばならぬ。(五)キニーネ鹽の丸劑は賦形藥及び結合藥の配伍が宜くないと或は軟か過ぎ、或はボロ〳〵に脆くなる恐れがあつて大いに熟練が要る。乃で本丸劑を製するに當つては、少量の酸を附加して捏り合せるときは餘程其の脆質を防ぐことが出來るものだ。

錠劑——本劑は粉末狀の主藥を乳糖或は白糖・アピアゴム末・澱粉若

くはショコラーデなどの賦形藥を以て圓形又は楕圓形に製した所の藥菓である。通常錠子一個の重量一グラムで、之を口中に含んで徐々に溶解せしめて服用するのだ。隨つて臭味の不快なる藥物は此の目的に供へることが出來ぬ。日本藥局方錠劑の製法を記せば次の如くである。

錠劑は特別に記するもの、外は善く乾燥せる藥物の細末、及び乳糖又は白糖の細末を混和し、稀酒精を以て潤し、適宜の錠劑塊を得るに至り、一グヲム(一・〇)となし、製す可し、其の錠劑塊の粘合し難いときは極めて少量のアラビアゴムを加ふることを得。

とある。併し此の錠劑は勿論錠劑器で製するのであるが、大いに技術を要するもので、迚も素人的に作れるものでは無い。

丞劑(又煉劑)——本劑は植物粉末類・鹽類等の藥物を蜂蜜或は單舍利別の如き糖質類と練合せて製するのだ。其の方法は、先づ右の藥品を乳鉢內に入れ、能く研つた後、液體藥物(例へば單舍利別の如き物)

或は粘い稠い藥物例へば蜂蜜の如き物を加へて練り合せ、全質と均同の軟塊とし、其の稠度は容器を傾けても容易に流れ出ぬ程の糊狀或は軟稠越幾斯位が丁度適するのである。

點眼劑——點眼劑は、點眼用藥物を單に蒸餾水中で溶解し、濾過して製したものである。時に浸煎劑を此の用に供することがある、從つて其の製方は水劑及び浸煎劑の法に依つて調製すれば可い。又本劑の用に供へる藥物は、多くは可溶性の物であるが、時として難溶性の物もある。此の場合には其の藥物を乳鉢内で能く研りながら、之に記載量の蒸餾水を少量づゝ滴加して後濾過して製するのである。

注入劑——本劑は注射器に依つて人體の或る局所に注入する所の藥液の總稱で其の製法は一般水劑の法則に依つて調製することが出來る。

注射劑——本劑も亦、前者と同じく注射器を以て人體の或る局所に注入する藥液の總稱である。併し本劑の場合は從來の慣習上、專ら皮下に

注射する藥液を指すのだ、從つて其の製方の上は於ても一段の注意が要る乃ち之を製するには先づ茲に用ふる所の器具、容器及び賦形液は凡て消毒し、後主藥を精密に秤り、之を液中に溶解し、濾過して製するのである。

含嗽劑——本劑は凡て口内を洗滌する目的に供へる藥液の總稱である。其の製法は一般の水劑並に浸煎劑の法に依るのであるから重ねて記す必要は無い。

洗滌劑——本劑の目的は病的なる不潔の物質を洗滌し、若くは皮膚の局所或は粘膜に藥液を觸れしめる爲に應用せられるのである、其の製法は前者と同じく一般水劑の法に依るべきものであるから、特に茲に其の製法を揭げるにも及ぶまい。

灌腸劑——本劑は注入劑の一種で特に直腸から輸る所の藥液の總稱て、之を別つて次の數種となす。曰く滋養灌腸劑、興奮灌腸劑、通利灌腸劑、止瀉灌腸劑である。其の製法は水劑・乳劑、浸煎劑

の應用に外ならぬから、茲には其の製法を省く。

坐劑——本劑は通常排泄管口に供へる所の外用藥である。本劑の特異性は體溫に依つて徐々に溶解することだ。而して本劑には、肛門坐劑、尿道坐劑、腟座劑の三種ある。日本藥局方規定の製法は、

坐劑を製するには特別に記するものゝ外は、カカオ脂を賦形藥とし、藥物は多くは其儘或は適宜の溶體に和して之に混和す可し。毒劇藥或は固形の藥品は處方中、之を明記せざるときは空洞坐劑に塡充す可からず。肛門坐劑は通常其長さ三乃至四センチメートル（3—4cm）にして底面の直徑一乃至一・五センチメートル（1—1.5cm）の圓錐形に製すべし。其他坐劑の形狀一般の規定又處方の示す所に從ひ圓柱形、球形、卵形若くは圓錐形となす可し。通常肛門坐劑は二乃至三グラム（2—3G）腟坐劑は四乃至六グラム（4—6G）の重量を要す可し。とある。

右の規定に依つて坐劑を製するには先づ磁製の乳鉢に主藥を秤り入れ、之に

少量の脂肪油、例へばオレーフ油の類を加へて能く研り、軟泥とした後之に賦形藥（カカオ脂ならば豫じめ薄く削つたる物を用ふるが可い）を加へて更に能く研り適當の稠度になつたら之を一定數に分け、規定の形狀にするのだ。日本藥局法の製法によると尿道坐劑に就いては何等の規定は無いが、通常肛門坐劑の十分の一乃至十分の二の重量を有して形狀も稍細長くするのである。

右にて調劑術に關する一斑を略述べたれば、序に小兒及び老人に對し、藥を與ふる分量の違ふ點及び含嗽法を大略記して此の章を終ることにする。乃でガウピウス氏といふ醫士は、二十年から六十年までの者に與ふる常量即ち一位とし、左記の如く定められたのである。

一年以下の者十五分ノ一	三年以下の者　六分の一
乃至十二分ノ一	四年以下の者　四分ノ一
二年以下の者　八分の一	四年乃至七年　三分ノ一

七年乃至十四年　二分ノ一　一　十四年乃至二十年　三分ノ二

六十年以上に至れば、年齢を加ふるに從ひ、大凡四分ノ三、三分ノ二、二分ノ一等の比例を以て減ずるのである。又ヨンゲといふドクトルは十二年以下の小兒に與ふる用量を記憶し易いため、左の法に由り、計算することにした、即ち現在の年齢に十二年を加へ、之を以て現在の年齢を割るのである。例へば三年の小兒に與ふる分量は $\frac{3}{3+12}=\frac{3}{15}=\frac{1}{5}$ となるやうな道理である。順次に列記すれば

一　$\frac{1}{1+12}=\frac{1}{13}$　二　$\frac{2}{2+12}=\frac{1}{7}$　三　$\frac{3}{3+12}=\frac{1}{5}$　四　$\frac{4}{4+12}=\frac{1}{4}$

五年　$\frac{5}{5+12}=\frac{5}{17}$　六年　$\frac{6}{6+12}=\frac{1}{3}$　七年　$\frac{7}{7+12}=\frac{7}{19}$　八年　$\frac{8}{8+12}=\frac{2}{5}$

九年　$\frac{9}{9+12}=\frac{3}{7}$　十年　$\frac{10}{10+12}=\frac{5}{11}$　十一年　$\frac{11}{11+12}=\frac{11}{23}$　十二年　$\frac{12}{12+12}=\frac{1}{2}$

右は何れも概略を示すもので、實際は身體の大小強弱に依つて判斷せ

ねばならぬ、是れ所謂匙加減とでも言ふ可きものであらう。

含嗽洗口法——咽頭や口中に病氣の有る場合に外用水劑を含嗽する所の方法である。それには其の水劑を口内に含み、頭を後方に傾け、口を開いて舌及び頰を彼此に動かせば可いのだ。含嗽に普通用ふる著名なる藥液は大抵左の如くである。

▲過滿俺酸加里　一・五
水　一〇〇・〇　口内悪臭等

▲鹽酸加里　二・〇乃至三・〇
水　一〇〇・〇　鵞口瘡等

▲炭酸加里　一・〇
水　一〇〇・〇　咽頭に稠い痰ある者等

▲重炭酸曹達　二・〇
水　一〇〇・〇　口内を清潔にする目的

▲硼酸　三・〇
水　一〇〇・〇　口内寄生物ある者等

▲撒里失爾酸　二・〇
水　一〇〇・〇　口内防腐の目的等

處方の部

神經系病篇

神經衰弱症

親讓りの遺産に滿足せず、鍬鋤手に取ることが厭になつた山木頓造は一攫千金、一時に富豪にならうと空米相場に手を出し、思つた事柄は一々失敗し一年經たぬ中に家屋數までも人手に渡つて了つた。事茲に至つては如何なる豪傑も悲觀せずには居られぬ。心は疑ひ深くなり、取越苦勞ばかりする。雜念が頻に發る。記憶力は非常に減つて只今の事でも忘れ易くなる。頭が何時も重苦しく眼は疲れ易く、それで夜は眠られぬ眠らうとすれば、來方行末の事等が胸に浮かぶ、漸との事で少し眠れば夢ばかり見る。其の夢も恐い夢、悲しい夢ばかりで碌な夢は見ぬ。食慾は進まず、便は秘結する手足は

冷える、動悸は高ぶり易い、身體は日に〳〵精力が弱くなつて行くのみ、孝心の深い長女二十歳は『お父樣、只今お醫者の被仰るには、投機事業をして、非常に腦を苦しめたのが原因となつた神經衰弱症ださうで、この病は藥も幾分服まねばならぬけれど、それよりも第一に仕事療法をした方が可いさうです。仕事療法といふのは、クヨ〳〵色々な事を思つてる暇に適度な勞働するのださうです、聞けば村長樣許では山地の開墾なさるさうです、御殘念では御座んせうが、妾も男になつたと思つて手傳ひますから、お父樣と弟と三人で引受ようぢやありませんか。』と言葉優しく勸むれば、一心に聞いてた長男十八歳は『僕も中學四年で退校したのは如何にも殘念だから今姉樣の言ひなさる開墾に手傳ひたいけれど、それよりも花の都へ上京し、牛乳配達なりしても大に學問を爲し、天晴豪い者になるから、家は御兩親と姉さんにお頼み申ます』父はハラ〳〵と涙を流し『俺故に皆に苦勞をさせる、斃れるまでも働かう惡かつ

た〳〵』と手を合はさんばかりに謝罪れば、妻のお何は『なアに、之も妾達を可愛ために出來た事、女房子供に謝罪るには及びません、妾もこれから一生懸命に内職しませう。』此の美しい一家の決議を聞いた醫師は大いに之に同情し、無報酬で診察し、無報酬で處方箋を與れた。其の處方箋は次の通りであつた。

(1) ケンチヤナ根浸 (三・〇)

橙皮 一〇〇・〇
舍利別 一〇・〇

右一日三回分服（食前三十分）

(2) 蒲公英越幾斯 三・〇
甘草末 適宜

右丸と爲し一日三回に分服

(1)は神經衰弱的の消化不良に良効を奏する所から服用せしめたのが何うも便秘に苦しむとの事で(2)に改めたのだ、即ち(2)は便秘する人の消化不

良に甚だ宜い。

(3) 炭酸鐵丸

右一日三回食後二丸宛。

最初より(3)を與へたいが、鐵劑は消化不良には害があるから12で食慾を進ませ然る後、此の強壯劑を與ふる順序にしたのである。鐵劑は固より貧血を癒す所の良藥である。

(4) アセトアニリード(劇) 一・一
臭剝 三・〇
乳糖 適宜

右分三包一日三回一包宛

消化劑・強壯劑を服んでゐても頭痛がして精神の過敏が止まぬから、其の頭痛を鎮め、精神の過敏を防ぐ爲に(1)(2)(3)の藥と同時に一週間置に(4)を服ませたのだ。一週間置に服ます譯は藥の中毒を防ぎ、且餘り連用すると

効か無くなるからである。

(5) 抱水アミーレン　二・〇

右膠囊に盛り臨臥に頓服

これは覺醒劑であつて、眠られぬ折に服むので眠られる晩は可成服まぬやうにするのである。斯くて某は優しい妻と娘に慰藉せられつつ、適度に働いて服藥も忘らず、其の上知足の利を悟つて天命に安んじてゐたれば身體も大いに健康に進み、以前よりは樂しい月日を送られるやうになつた。

話變つて長男觀一は父の從弟なる某を便つて上京し、勉學の出來る奉公口を探したが思ふ通りの處も無いので、何の其の岩をも徹す桑の弓ぢやと俥曳になりつゝ某中學の四年級に入學し、學校より歸れば夜遲くまでも働き、客待してる間に復習豫習、一寸の光陰も徒には費さぬ、斯くて中學は中以下の成績で卒業し、高等學校も劣等ではあつたが何うやら

斯うやら濟んで、大學の角帽を冠られるやうにはなつたが、學校の程度が進めば進む程腦力の使用が重くなるのと父の神經質を遺傳してゐ爲か、無常を感ぜられる、取越苦勞はする、それで劣情は起る、疑ひ深くなる、記憶力は減る、書物を讀んでゐても色々の雜念が頻りに起つて何を讀んでゐたか所謂蛙鳴蟬噪に均しい。頭が常に重苦しく、眼は疲れ易く、夜は眠られず、漸く眠れば猥がましい夢など見て遺精する事さへもある。朝は起るに懶く食慾は進まず、働く勇氣は出ず、俥を曳いて驅れば動悸が高ぶつて老人の車夫程も走れぬ。之では不可ぬと某醫の診察を受けたれば、『腦神經衰弱症です、將來立派な者にならうと思ふならば、思ひ切つて一年も二年も勉學を中絶し、其の間は賣レ劔買レ牛いや投レ筆把レ鍬といふ氣になり、鄕里若くは其の他の田舍に行き、漁夫或は農夫と業を共にし、山水花木の如き自然の美を愛し、冷浴溫浴を實行し、新鮮の綠菜、新鮮の鳥獸肉を食して體質を改良し、然る後勉學しなさい、勉學する時

來つても金が無かつたら學問を止し玉へ、學問ばかりが立身出世の道では無い、勞働しながら身代を作るも國家に盡すの道ぢや。藥ですか、ウンそれは近頃新藥も餘程發見せられた、處方を書いて上げよう』

(1) バラールデヒード 三・〇
プランデー 五・〇
橙皮舍利別 二〇・〇
右混和して臨臥頓服

(2) プロモコル 一・五
乳糖 適宜
右分三包一日三回一宛

(3) オルガノリン 一・五
白糖 適宜
右分三包一日三回一包

(4) 十%プロミピン 一〇・〇
右葡萄酒五・〇の上に浮べて一日に三回服用

(5) チレオイド 〇・九
乳糖 適宜
右分三包一日三回一包

(6) ユーキリン 二・〇
白糖 適宜
右分三包一日三回食後一包

(1)は神經性不眠に良効がある。元來大抵の麻醉劑は連服すると効力を減ずるから勢ひ增量すれば中毒の恐れがある、然るにバラールデヒードは其の恐れは無いでは無いが、比較的少いものだ(2)は精神の興奮及び煩悶狀態に効があるが、併し二月三月と連服するは宜しく無いから中止する必要がある。(3)は神經衰弱及び諸種の衰弱性に宜いのだが價は少し高い。(4)は不眠頭痛に良効あるし、又夢を見ぬやうになり、遺精も止み、生殖神經の衰弱を回復するやうになる、特に青年者の神經衰弱には時々服用す可き必要がある。(5)は鬱憂症の偉効

藥で、精神の不安を治すものではあるが、痩せた人には餘り宜しく無い、換言すれば肥滿者の精神的療法としては持つて來いだ。(6)は神經衰弱、神經過敏症、不眠症、陰萎、食慾不進、消化障害などに幾月連服しても効力あるばかりで害は無い。

觀一は鄕里へ無成功で歸るといふは愧づ可き事だとし、友人の世話で下總の或る地に行き、自分の學びかけた農科の智識を利用して耕作に從事し、或る時は又海岸に出で〻漁夫の手傳をなし、朝は冷水浴、夜は必ず臨臥に溫浴、春風の晨秋月の夕べ、一日も缺かすこと無く、善く働いて善く遊び、善く眠つて善く食ひ、自然を愛して天命に安んじ、而も柔和忍辱の道を守つたれば、農夫漁人の輩には感心な若人だと敬愛せられて、居ること二年にして數百金の貯蓄を得三年目に再び上京して、今度は勉學のみに從事したれば目出度農學士となり、後には家産を回復して兩親を喜ばせたといふ。

獸私的里

觀一の姉お菊は三十一歳まで兩親の許に働いてゐたが、親や他人の勸めに從ひ、隣村の富豪四十七歳の後妻となつた、夫は常識に富んだ人で、陰になり陽になりして勞つて呉れるが、姑は非常な我儘者で何かに附けては口汚なく誹るので、人知れず泣いてばかりゐたが、或る日の事不圖小說「不如歸」を讀み、深く涙子の身の上に同情し、「嗚呼世は墓無いものだ」と觀念し、氣分が悪いからとて一室に閉ぢ籠もつた。優しい心の夫と下女のお初は色々と慰めては呉れるが咽喉に何か塞へてるやうだとて食事は一向に取らず、頭痛がする、眩暈がするとて夜も碌々眠らず、少し眠つたかと思へば夢に魘されて起きる。醫士は『精神感動から來た獸私的里です、此の病に罹ると心は僻み、我儘になり、病氣を大袈裟に言ひたがるものですから、家人たる者は病氣の爲にとして一歩も二歩も讓つて遣らねばなりません、食

物なども或る點までは本人の意に適ふ物を喰べさすやうにし、何々か滋養だからなどの自分定義を用ひてはなりません』として次の樣な藥を用ひた。

(1) 纈草根浸 (二・〇)

臭素カリウム 一〇〇・〇
單舍 四・〇
右一日三回分服

(2) 阿魏丁幾 一〇・〇
纈草丁幾 三・〇
苦丁 四・〇
水 二・〇
一〇〇・〇

(3) 纈草丁幾 四・〇
林檎鐵丁幾 三・〇
單舍 八・〇
水 一〇〇・〇
右一日三回分服

(4) 抱水クロラル(劇) 一・〇
燈皮舍利別 一〇・〇
水 三〇・〇

右臨臥頓服

(5) スルフオナール(劇) 〇・五
白糖 乃至 一・〇
適宜
右臨臥頓服

(1)の纈草根も臭素カリウムも共に鎮痙鎮靜の効を奏するものだが、臭素の方は連服すると色々の中毒があるから、時々(2)に換ねばならぬ。(2)は中毒の恐れが無いけれど効力は少ない。(3)は鎮靜劑に鐵劑を加へて貧血を救はん爲である。(4)(5)は共に痲醉劑だ。兩々取り換へて用ひぬと習慣が附いて効力を減ずるからである。右の樣に醫士も苦心して用ふるけれど、お菊には何等の効目は無い。病は益募るばかりで、或は痙攣を發し、身體が引き釣れるやうな事があつたり、或は四肢殊に下肢に痲痺を起したりし、時々人事不省になることさへもある。それから幻覺錯覺とて無い物が見えたり、物を見違つたりして、大いに驚くこともある。夫の妹は兄の氣象に

能く似て居り、悧潑で智情意の調和してる女なれば、時々〳〵見舞に來ては慰めてゐたが、此の有樣を見、母に向かつて言ふ樣、『お母樣、母ー斯ういふ人を離緣しようとは餘りです、母上が妾を可愛と思ひなさるのも義姉樣のお母樣が義姉樣を可愛と思ひなさるのも同じでは有りませんか、義姉樣は名代の孝行者、其の心は姑に對しても同じです、それだのに母上は貧乏者の娘だとばかり叱つてゐなさつたでは有りませんか貧乏なればこそ四十七歳といふ年寄の後妻になつたのです、若も妾を今の姑が叱つてばかりゐなさつたら母上は腹が立つに違ひ有りません可愛息子の女房で、其の息子が可愛がつてゐなさるのに母上は餘りで御座いますと』半巾眼に當て、潸々と泣く母親は即て起ち上つたかと思ふと、病人の側に行き『嫁女〳〵、妾が惡かつたのぢや、妾が其方を病氣にしたのぢや、これから伜と相談し、お金が何程費つても東京の名醫を招待し、診て貰ふことにしませうから……』嫁は此の悔悟の誠には不自由な身體を起して拜んだ。

神經系統病では日本で一と言はるゝ醫學博士切久造先生は丁寧に診察し終つて別室に至り、『母子及び主任醫に向ひ、莞爾として曰く、『病氣は隨分重いですが、比較的榮養が衰へてゐません、滋養物も淡泊とした物を轉轉交互に取り換て與へた方が可いです、例へば朝に湯豆腐を用ひたら午飯には鯛の潮煮、晩餐には鷄肉の鋤燒といふ風にして下さい。病氣を輕く言ふのは却て慰める道ではありません、お醫者も仲々重い病なれど、非常な妙藥が發明せられたから必ず治して上げると言つてゐなさる位に言ふが可いですそれから溫浴をしながら頭部に冷水を灌ぐ法も行つて試るが宜いし、病の幾分か快い時には全身浴をするのも宜しく、又微溫の雨水浴も面白いです、それから金屬療法即ち亞鉛板なり銅板なりを病者の皮膚に當てるのも誘念法として仲々効が有ります。其の他按摩や電氣なども侮られぬ効があるのです、藥ですか、今までの處方で十分ですが併し病者の方では折角東京から來て同じ藥では信用が惡いから一つ姿を換て見るも

面白いでせう、ハア〳〵〳〵』と筆を執り

(1)ギノバール
一日三回食後一カフセル
宛

(2)ヴエロナールナトリウム　〇・五
單舍　五・〇
水　三〇・〇

(3)ノイロフエブリン(劑)　一・五
右臨臥頓服
白糖　二・〇

右分三包一日三回一包

(4)アルゼンフエラトーゼ　二〇・〇
單舍　八・〇
水　一〇〇・〇
右一日三回食後分服

(5)ヴアリール
右一日二回乃至三回、一回〇・一二五(膠囊に入れ賣つてある)宛

(1)はヒステリーノ特効藥とも名づく可き藥で、充血性月經困難にも鎮痛の効がある。(2)は不眠症・ヒステリー・ヒポコンデル・憂鬱症等に用ひ巣鴨精神病院などにも精神錯亂症等に有効だとして用ひてある。(3)は頭痛偏頭痛月經時の不安狀態、婦人の常習眩暈などに用ふると僅に三十分時程で効が表れて來るヒステリー者には是非共用ふ可き藥だ。(4)は神經疲勞、ヒステリー、貧血、重病恢復期等に有効で服用するに從ひ外貌を爽快にし記憶力を進めるものだ。(5)は纖草劑の代用品でヒステリー、月經不調等に至極効がある此の(1)より(5)までを或は時に中止し、或は連服し、交互に轉々して匙加減するが名醫の名醫たる所である。

其の後主任醫は、切博士の方針通り、臨機應變の治療を用ひ、家庭も非常に圓滿になつたれば菊子も次第に快方に赴き其の翌年は夫と共に草鞋穿旅行をする事約半年、身心は非常に强健になり、其の又翌年五

月に「鯉幟此家にも日本男兒有り」になつた目出度〳〵。

腦充血

山木頓造は一心に働いて幾分の貯蓄も作し、其の上、倅の觀一は成功し、娘は富豪の家に嫁ぎ、圓滿なる家庭を作るやうになつた所から氣が弛み、何の仕事も爲ず唯朝から晩まで酒浸しにのみなるやうになつた。最早六十歳に垂んとする身何ぞ中毒の恐れ無きを得んや。酒を飲まぬ時でも頭や顏が紅く熱る感覺は絶えず頭痛はする耳は鳴る、時偶には精神錯亂を來すやうな事もある、主治醫の言ふやう『眼の結膜は非常に充血してをり、瞳孔は甚だ小さくなつてゐる、之紛も無く酒精中毒が原因となつた腦充血です今は急性に起つてゐますが、慢性にならぬやう攝生をなし、酒は言ふに及ばず、茶や珈琲などの興奮性飲料も禁ぜねばなりません』と懇々說諭し、先づ病室を涼しく暗くし、枕を高くして頭に氷囊を載せ耳後に蛭を貼け、

上膊と腓腸に芥子を塗り、尙溫脚浴をなさしめ、全身を按摩せしめた。藥として、

(1)

硫酸苦土	二〇・〇
稀鹽酸	一・〇
單舍	一〇・〇
溫湯	一〇〇・〇

右一日三回分服

(2)

抱水クロラール(劇)	〇・五
乃至	一・〇
單舍	五・〇
護謨漿	二五・〇

右頓服

(1)は下劑で有つて腦の血液を下部に導く爲、之は三四日乃至一週間も與へ、(2)は麻醉劑であるが、病症劇しければ一日に二三回も與へねばならぬこともある。

腦卒中

山木頓造、腦充血の治つた當分の中に酒を慎んでゐたけれど、『咽元過ぐれば暑さ忘れる』の諺に洩れず、半合位は差支無からう、一合位は害にもなるまいと又々飲み始め、半合や一合で濟めば宜いが酒は仲々然う注文通に行くものでは無くて次第〳〵に其の量を増したれば、其の場匂に眩暈がしたり、眠氣を催したり、悪心或は嘔吐が有つたりして、記憶力を大に減じ、精神は少し朦朧し、只今の事でも忘れるやうになつた。それでも妻や倅の意見に從はず矢張チビリ〳〵と杯を離さぬ。或る日の事、客と對話して居たが、突然卒倒して人事不省になつた、それ醫士よと直に急使を馳せれば醫士は早速車を飛ばせて來た、一診するや否や、これは卒中であると先づ頭部を高く起し、上半身を擧げて臥さしめ、耳後及び顳顬部に蛭を貼け、項部には發胞膏を貼り、腓腸筋には芥子を塗り、尚又顳顬部に吸角をつけて瀉血を促し左の藥を灌腸した。

カルルス泉鹽　二〇・〇　微溫湯　三〇〇・〇

右灌腸

右の療法を怠らず續け、醫士も看婦的に熱心なる治療を施したれば、約二十時間程で漸と生氣に立ち返り、少しく口を利くやうになつたれど、何を言ふのか不明瞭で、神識は缺乏してをり、次第に半身不隨意となり、手足は大いに顫へてゐる。醫士は極めて消化し易き淡泊なる食餌を與へるやうにと家人に注意し、最初の中は

大黄浸(二・〇)　一〇〇・〇　單舍　一〇・〇

センナ浸(一・〇)　右一日三回分服

の下劑を與へてゐたが、四五日經つと、

沃度曹達　一・五　單舍　八・〇

苦丁　二・〇　水　二・〇

右一日三回分服

の吸收劑を與へ、尙數十日の後、左の如き處方も試みた。

硝酸ストリキニーネ（毒）　一・〇〇一

蒸餾水　一・〇

右一日一回皮下注射

但し硝酸ストリキニーネは痲痺に對して効あるとの事なるが、甚だ疑はしきのみならず、特に卒中には禁じた方が宜いと著者は信ず。

斯くて頓造は幾分か快よくなつて杖に縋りながら二三町は歩行も出來るやうになつたれど、南京の鉢に龜裂の入つた樣なもので、數年の後に冥土へ移轉したとは之も自業自得である。

腦貧血

頓造の亡くなつた後、一年程經つと妻の操は時々眼が暗くなつて來て、脈が速く數多く搏ち、耳が鳴り、眼から火花が出るやうに感じ、頭痛眩暈加ふる

に惡心を催し、又吐くこともある。家人は治療を請へと勸めるが、『なあに一時の眩暈で直に治りますよ』と賣藥位で濟ましてゐたが、日を經月を累ぬるに從ひ、眠りを催し易く意思は變り易く、食慾は進まず手足は顫へ、唇の色は褪め四肢は非常に冷える。孝行なる觀一は是非にと醫士を招いて診察を乞ひたれば『これア亡くなられた山木さんと反對に腦貧血です畢竟お若い時から色々と苦勞もし、心配もせられた事が原因となつてゐけれど一つは胃が弱いからでもあります。精神も身體も安靜にして滋養の食物例へば魚鳥獸の肉、鷄卵、綠菜特に波蘿草の類が宜いです、飲めたら葡萄酒を少しづゝ、飲し上れ、山木さんには酒を禁じたが貴女に特に勸めるとは妙ですな、ハア〈〈〈』と葉卷を燻らした後、更に言葉を續け、『今後又卒倒するやうな事があつたら、御家族の方は御隱居さんの頭を低く下げ、平らに臥さしめ、顏に冷水を注ぎ間も無く濃い茶又は葡萄酒を少し上げるのです葡萄酒は日本藥局方のをお買ひ遊ばせ、一番安心です、味は惡いですか

ら白糖をお入れになつた方が可いでせう』と左の處方藥を與へた。

沃度鐵舍利別　五・〇

水　一〇〇・〇

右一日三回食後分服

苦丁　二・〇

之は强壯劑であつて連服しても可いが之を服んでる中は茶を禁ぜねばならぬ。

斯くて其の後も數度失神卒倒があつて醫士の間に各ふ場合には醫士は、

○・六％食鹽液

右三十九度に溫め皮下注射

或は又

樟腦　一・〇

オレフ油　四・〇

右皮下注射

右は何れも興奮劑となすものではあるが高度の貧血で無ければ行ふ必要が

無い。其後操は段々全快し念佛三昧に氣樂な世を送つてるとのことであつた。

脊髓癆

左の一篇は病氣に關係少い事柄が多いやうなれど、事實で而も著者が興味を感じた話なれば記すのである。

脇竹安藏は無學の者ではあれど、極めて磊落な女房子も無い獨身者、越中の新港から能登の七尾まで餘り大きくも無い舟に積荷して年百年中僅の賃銀で運んでるのが彼の職業、天氣の宜い時は日本海の潮風に胸毛吹かせて『來いといふたとて行かれうか佐渡へ、佐渡は四十五里波の上』ゴックンショ〳〵と舵に合せて鼻歌面白けれど、風立ち波荒れる時や、横降りに降り頻る雨の日などには身體をビショ濡に濡して息も絶々になるやうなことも無いでは無い。されど、生來極めて强健な彼は『ナーニ着いてから一

杯飲れば疲勞も何もあつたもんぢや無い。』之が彼に對しては何よりの慰藉である。斯ういふ渡生を彼が十八歳の時から四十五歳になるまで續けてゐた。話變つて著者も越中の生れ、久方振に歸鄉し、新湊から氷見町まで此の船に乘つた。之は幼少より此男を知つてたのと陸路を行くよりも舟に乘ることが好な爲とであつた。山から松の枝が水鏡見てる風情や、小瀧の落ちてる態、小島の彼方此方に飛んでる趣、舟が尙も進めば義經の雨晴しといふ家の樣な巖窟が海に指し出でたる、白砂青松の遠くに見ゆるなど、幼少より能く見た景色とは言ひながら、今更の如く面白い。『俺は今塵多い都に齷齪とした暮しをしてるがお前の樣に斯うして年百年中山水を友達にしておれば病氣も何も起るまい、幾百歳まで生きてられるかも知れん實に羨ましいれ』『旦那はん然うぢや御座るません、元は丈夫でしたが、去年からちふものは僂麻質斯ぢやとか、又は脚氣ぢやとか、中には咳嗽も出んのにせきるゐ病ぢやとか、醫者の診立は色々でがんして藥も服みましたれど今

に治らず、實に苦いがを堪へて飯の爲に働いとるがで御座るますてイ』『脊髓病』といふのだらう』『然うぢやつたかも知るません』『病の起り始めから今は何ういふ風に苦いか話して御覽』『始めは下肢の痛いことがあつてそれが大變に痛いこともあれば又左程で無いこともあるし、些とも痛まんこともあるまました、それは餘る痛い時には藥も服みましたが、段々痛まんやうになると今度は指尖が痲痺れ、脊中や腰が絞められるやうに痛い、而して其の頭痛のするやうな、嘔吐さうな何とも言へん厭な氣持のことがあるます』『指の痲痺れるといふのは藥指と小指が甚いのだらう』『それに相違御座るまません、旦那はんは東京で醫者の修業さつしやつたちふのぢやから一つ診て下つしやい』乃で舟を義經雨晴に引き返し、掛茶屋から巖窟の中に毛氈など敷かせて診察に取り掛つた。先づ石に腰掛させて膝以下を垂れしめ、輕く打つて見れば、膝蓋の腱反射は甚だ鈍い。膝の下を打つと健康者は不隨意に反動せしめるものであるが、脊髓痨者や脚氣病は此の反動は無

いものだ、次に瞳孔を見ると、瞳孔が狹く小さくなつてゐて、光線が落射しても更に縮小せぬ其の他方々を診査たが、他の疾病では無くて全く脊髓痨だと斷案を下した。『梅毒に掛つたことがあるだらう』『然うでがす、今より十年前のこつて御座るますが能く解るもんで御座るますね』『お前は船乘職業で身體を濡らしたこと、梅毒の爲とで斯うなつたのだ、他に何か之に代へる宜い職業をした方が可い』『それでは山の方に知つた者も居りますさかへ、水の縁を放れて炭燒にでもなるませうか、それにしても何うしたら宜しう御座るますやら？』『熱い湯には入らぬやうにして毎晩々々濕つた布片を以て下肢と腹の周圍を繃帶して寢るんだ』『これア妙だ、水に濡らしては不可んちふのに、態々濡れたもんで卷くとは……』而して村の醫者は毎日熱い風呂に入れと言はしやつたけれど……』『ハア〳〵〳〵何う說明したらよからう兎に角、俺の言ふ通りにするのだ、村のお醫者は傻麻質斯と診たから熱い風呂を勸めたのだ、初めの中に診察すれば俺でも然う診察したかも知れ

ん、無理の無いことだ。それから身體を靜にして心配をせぬやう、旨い物を食べて、酒を飲まぬ方が可い。內服藥が、それは處方書を書いて遣るから村のお醫者に見せて相談するが宜い』と次の樣に書いて渡したのである。

(1) 硝酸銀（劇） 〇・三
陶土 一五・〇
餾水 適宜
右百丸と爲し陶土を衣とし毎日三丸、後には五丸

(2) 硝酸ストリキニーネ（毒） 〇・〇〇三
甘草末、甘草羔 各適宜
右六丸と爲し、一日二三回二丸宛

(3) 燐（毒） 〇・〇〇一
肝油 一〇・〇
右三分して一日三回に分服

(4) サリチール酸曹達 四・〇

薄荷水　三〇・〇
單舍　八・〇
水　七〇・〇
右一日三回分服

(5)安知必林(劑)　一・五
白糖　適宜
右分三包一日三回一包

(6)アセトアニリード(劑)　一・〇
白糖　適宜
右分三包一日三回一包

(7)フエナセチン(劑)　二・〇
白糖　適宜
右分三包一日三回分服

(8)答麻林度煎(二〇・〇)
大黃丁幾　三〇・〇
單舍　八・〇
右一日三回分服

(9)麥角越幾斯(劑)　〇・〇六
甘草末、甘草羔　各適宜
右六丸と爲し一日三回
二丸宛

(10)法列兒水(巻)　三適
桂皮水　一〇〇・〇
右一日三回分服

(11)金硫黃(劑)　〇・〇八
蜀葵末　各適宜
甘草羔

右六丸と爲し一日三回
二丸

(12)安母尼亞石鹼　三〇・〇
クロロフオルム(劑)　二〇・〇
右塗擦

(1)は本病に屢々効あることは諸醫の認むる所(2)は痲痺諸症に効あるも本病には害有つて効少きものと小生は信じ居り候。(3)は神經痛、佝僂病鬱憂症、腦病等に効あるもので、本病にも試む可きものであらう。(4)(5)(6)(7)は何れも鎭痛解熱の効あるが、何れも持長して用ふるは宜しからず故に交互に轉ぜねばならぬ、小生はフエナセチンが最も有効ならんと信じ候が如何(8)は緩下劑として便秘の際に用ふ(9)は矢張痲痺を治す目的で、勝

膀胱の故障ある場合には效あらんか。(10)は變質強壯劑として本症に賞用する醫士もあるが、小生は左程賞用致さず候。(11)の金硫黄は變質劑、蕃木鼈は痲痺を治す目的ではあるけれど、金硫黄の變質目的は今や陳腐の說に屬す。(12)の外用は幾分鎭痛の効有らんか。右の外水銀軟膏塗擦の驅梅療法を勸める醫士も數多有レ之候へども、本症特に此の患者には何等の効無きこと、診斷仕候。要するに右の處方を臨機應變御參考下され候はゞ幸甚々々。併し又次の處方

沃度カリムウ(劇) 三・〇
苦丁 三・〇
右一日三回二日分服

單舍 一五・〇
水 二〇〇・〇

を用ひ、平流電氣を脊椎部の上方に積極、下方に消極(每二日一回五分間)其の他按摩法を賞用してる某博士も有レ之候これ亦御參考までに記し申候

月日　五味國手へ　糸左近

斯う書いて液したが、五味先生は之を參考して奚れたか、又脇竹安藏は何うしたか今に知る由も無い。

依ト昆兒

此の病氣に就き面白い余の經驗談がある、此の經驗談は世の醫士たる者及び患者一般に大いに讀んでおかねばならぬことだと思ふ。

頃は明治三十一年六月十九日。日まで忘れぬ、この日に知己の紹介で清水幸助(年齡二十一、田舍の金滿家の長男)といふ人を診察した。之を望診するに、體骼逞壯即ち筋肉の發達と言ひ、色澤善いこと、言ひ、何處に病

氣が有るだらうと疑はる、やうな姿、例に依つて其の既往症を尋ぬれば、

『去年の五月何と無く苦しかつたから村の醫士某に診て貰つた所が心臟瓣膜病であるといふ。それから二日程經て治つたやうにあつたが、折しも友人に話したければ、それは大變だ、心臟瓣膜病なら俄には死なぬけれど、一生治らぬ、早く治療し玉へとのこと、さう言はれて見ると心配で堪まりませぬ、彼是してゐる中に胃は痛む、頭痛はする、脊や腰は絞めらるゝやうな感じがするから、又醫者に診察を請ひたれば、心臟病では無い、脊髓痨である、飲酒や房事は堅く慎め云々。脊髓痨は固より重い病であることは知つてゐたから更に心配を增した依つて更に他の醫者に診て貰へば腦病であると言ふ何れにしても重い病、又更に其の上の醫者、其の上の醫者と換へたが皆々腦病と定まつた、これより先月まで治療を受けましたが、一向に宜しく無いから、上京して日本第一等の醫者は誰であらうと尋ぬれば○○○病院長醫學博士甘井退樣であるとの答、早速之に從つて往つた

ら、豈圖らんや病名大いに異り膀胱痲痺病、成程大醫は大醫だけあつて凡々の輩とは大いに診立が違ふわいと感じまして、今日まで三十五日間一心に服藥してゐますが、始めの中は少し効があつたれど、郷里の女房が訪れて來た以來又々惡くなりました云々』これを聞き終つた時には疑ひの雲がムラ〳〵と胸に滿ちた。心臟瓣膜病……二日で治り、脊髓痨……腦病……膀胱痲痺……妻が訪ねて來たら重つた、實に變な病ちやなあ……して又今は何のやうに苦しいです』何の樣にと形容はし難いですが、何と無く頭が重くて食慾は進まず、大便の通じは四五日目に一度、それ故か腹が張つて小便は一晩に六七度乃至十度もいたさねばならぬ、兎に角先年より腕は腕力大いに減りました。それは偖おき、甘井先生のお陰で少し宜かつたのを、何を隱しませう久しぶりで妻と交はりをいたしたものですから又々重つたのでせう。』それより尙色々問答してから觸診、聽診、打診など殘りなく丁寧に終つたが、何等の異常も無い。腦病でも無ければ膀胱痲痺で

も斷然無い。良あつてこれは間違も無くヒポコンデル病であると大悟徹底した。大悟徹底した譯は斯うなのである。去年の五月何と無く苦しかつたといふのは、感冒でゞもあつたらう。所が藪井先生、心臟の音を聽き間違つて重い病名をつけたが、當人其の病名の何たるを知らぬから一向平氣で居たし、殊に感冒位だから治つて了つたのを、友人の注意で心配し始めたが病の本。其の心配した爲に胃痛や頭痛從つて脊腰も痛んだのである。然るに又、早計先生僅の點が似てゐるために脊髓痨などゝいふ重い診斷をした。重い診斷して見ると、飲酒房事を禁ずるは當然である、禁ぜられた者は心配を增すはこれ亦當然の理。それで心配に心配を重ねたることなれば、多少腦病の徵候を呈はしたかも知れぬ、イヤ呈はしたに違ひ無い、故に便秘もあれば不眠症も起る、これ亦必然の道理。然るに○○○病院は朝の九時から正午まで僅か三時間に少くも百人の患者を診察することなれば、一分と四十八秒時間に大切

なる人間樣を診る割合になる、さすれば如何なる大醫も宜い診斷の出來る筈は無い、無いから一晩に十度も小便するといふことだけで膀胱麻痺といふ名を附けたので、神經系に異常あり且眠られぬために屢々小便に行くのであるといふ考へのおこる暇の無いのは無理の無いことである。されど大醫と信じてゐる矢先へ今迄に異つた病名であるから尙有難い有難いから少しの効有つたのである、然る處へ最愛の妻が來た、妙齡の男女なれば不知一夜の夢を見た、見たは見たが、前に房事を禁ぜられたことが先入師となつてゐるから愈氣になる固より氣にかゝつたのが病の本なれば、又候重くなつたのである。と余は斯う診察したけれど正直に答へては却て病者の爲にならぬと考へたから『矢張膀胱麻痺です、私は此の病を治すが何よりの得意、必ず向ふ半年間に夢の醒めた樣にして上げませう、それに就いては養生をせねばなりませぬ、養生法は新鮮なる空氣中に散歩することを勉め精神を色々に轉ぜしめて樂しむが何よりです、今日は上野公園に遊び明日

は隅田川に棹さし、或は手品、或は立突といふやうに換るが宜いです、而して消化のし易い滋養の食物を攝つて、茶、珈琲、酒類などの飲料を嚴禁せねばなりません』と告げおいて左の如き處方藥を與へた。

(1)ブロームアンモニウム　一・五
苦味丁幾　二・〇
單舍　八・〇
水　一〇〇・〇
右一日三回分服

(2)ブロームカリウム　三・〇
纈草末　一・〇
ゲンチアナ末　一・〇
右分三包一日三回一包　同上

(3)スルフオナール(劇)　〇・五
乃至　一・〇
適宜
白糖
右臨臥頓服

の如き平凡な處方と其の他、神經衰弱の章で用ひた處方も應用し、斯くて診る度毎に少し宛快くなつたと方便術を施したければ、當人も大いに信用して吳る〻爲其の上夜安眠の出來る方法に導いたものゆゑ、小便に往く數は次第に減り最早健康無事にならうといふ嬉しい所へ、霹靂一聲徵兵の檢査、檢査は固より覺悟の年なれど病氣故に必ず不合格と自分免許をしてゐたのに甲の合格『私は永らく病氣に惱んでゐた弱蟲で御座いまする何うぞ……』『黙れッ、汝が病氣なら世界に健康者は居らぬぞ、精神を勵まして御國の爲に忠勇の武士となれい。』大喝一聲の下に何の返事も出來ぬが大病後と思つてる身なれば、下手軍醫の誤診と誤解し入營して後は、又々弱い身にこのやうな酷い努めをなさしめるとはと心配し始めたが病を重くし遂に可惜健康體を轟然たる汽車に數かせて自害した。嗚呼愚なるかな、嗚呼憐れむ可きかな。けれども之を殺した者は汽車でも無く、自害でも無く唯最初の藪井先生である、醫士たる身は小心翼々として赤誠を盡きねば

ならぬ。田舍の普通醫は尙恕すべきとしても、帝都の中央に巍々たる病院を立て醫學博士の學位まで有ちながら、ヒポコンデルの診斷がつかぬとは抑も何事ぞや、これ診斷がつかぬにはあられど、利を貪らんが爲に一分時間程に大切なる玉の緒を取り扱ふからである。縱ひ診察料を高く取つても、多くの人を疎漏に診ぬのが正當な醫士と謂はねばならぬ、故に患者も亦、是等の點に能く注意して醫士を選び玉へ。

神經痛

唯單に神經痛と言つても其の中に色々の種類がある。即ち三叉神經痛、肋間神經痛、坐骨神經痛又び生殖器神經痛等多くあつて、之を一々區別して說くときは餘り專門的になるから玆には槪括して說くことにする又從つて談話も書くことが出來ぬから、內科學的に原因、病狀、療法と區別し、其の終りに處方を揭げておく。

〔原因〕の主なるものを列記すれば遺傳や體質の不良、感冒、外傷、傳染病後、貧血、精神過勞、生殖器病、梅毒、肺病及び動脈瘤等であつて、其の中にも三叉神經痛は頭骨の病、中耳の病に多く發し肋間神經痛は肋骨病脊髓病の續發症となるなど其の部分に依つて原因も多少違ふ年齡は中年より老年にかけて起るが、小兒には極めて少い。性から言ふと、男子よりも婦人に多いこれは妊娠、產褥、月經閉止等の生殖器に關する故障が男子よりも多いからであらう。去りながら、坐骨神經痛、膊神經痛などは婦人よりも男子に發し易い。其の他不明の原因もあるが、兎に角眞の原因及び病理に至つては尙之を詳らかに說明の出來ぬ事柄が多くある〔病狀〕を一言に盡くせば、神經の痛むのであつて、其の痛みは俄然として起ることもあれば、又或る前徵例へば寒さを覺えたとか、又奇妙な痒さをするとかして、其の揚句に起ることもある。中には左程に痛まぬものもあるが、多くは猛烈で灼くが如く切るが如く、或は裂くが如くで、夫

等の痛みは一時緩むことがあつたり、或は引き續いて惱むのがある。斯くて寒冷な空氣や精神感動及び患部の運動は其の痛みを增さしめるものだ。次に知覺機の障害があつて神經痛の部分の皮膚は劇しい知覺脫失或は弱い知覺脫失が有り、而して其の痛みが歇んでゐる時や或は痛みの歇んだ直後に著るしいものだ、されど其の下層に在る部分の知覺は過敏になつて輕く壓しても或る一定點に非常な痛みを覺える。この疼痛點は診斷上に於て大切なるものである。次に疼痛部に麻痺の起ることもある。次に疼痛部殊に顏面痛即ち三叉神經痛に於ては皮膚及び結膜が著しく蒼白くなるか或は紅くなることが稀でない次に涙や汗の出ることもある。又重症の神經痛が幾久しく續くと其の神經の分布してる部分の組織に變化を來し、毛髮が白くなつたり、脫けたりし、或は皮膚が厚くなつたり、反對に消削たりし、或は皮膚が變色して色素を沈着してるなどの妙な症狀を來すことがある。次に一般の榮養は左程影響を蒙らぬこともあれど、大抵の者

は疼痛の爲に睡眠を妨げられ、及び食慾の減ずる所からして、自然に色が蒼白くなり、身體は痩せ衰へて來る。次に精神狀態も亦影響を受け鬱憂の狀を呈し、中には自殺を企てたる者さへもある。本病の經過は甚だしい差等のあるもので其の痛む時も、一日に數回なるもあるし或は數日で止むのもあるし、或は時を定めて正規に發するのもあれば、或は不正規に發するのもある。而して一生涯治らぬもあれば直に治るもある或は數年惱んで遂に全治する症などあつて、其の豫後の診斷は何とも見極めが出來ぬ〔療法〕は第一に原因療法を施さねばならぬ。例ば腫瘍や梅毒又はマラリア等の爲に來たのであつたら其の腫瘍を摘出するとか、或は水銀療法をするとか、或は規尼涅を服用するとかの如し。殊に規尼涅はマラリアが原因で無くても効があることもある。規尼涅は正規の時間を隔て、一回に一〇乃至三〇の大量を用ふることがある。規尼涅を用ひても効の無き場合には亞砒酸又法列兒水を試みねばならぬ。次に一般に適當なる食物即ち魚

鳥獸の肉類及び嫩弱なる野菜類を與へて榮養を佳良ならしめ、溫暖なる地方へ轉居し、海水浴、冷水浴及び溫泉浴は至極宜い。但し顏面の神經痛には溫泉浴の奏効を認めぬ。次に芥子を塗たり發胞膏を貼つたりする療法もあるが、時には幾分の効あるやうなれど、時には全く無効なこともある。次に電氣療法も亦是非共試みる必要がある。內服藥としては前述の外に撒里矢酸曹達、安知必林、アセトアニリード、フエナセチン、アスピリン等を轉々交換して用ひ良結果を得たこともある。又プロムカリウムの大量即ち一日量五・〇乃至一〇・〇も用ひて奏効を見ることがある又發作間にはモルヒネの皮下注射も止むを得ぬものだ。併し長久しく續く患者には其の發する度毎にモルヒネの注射してゐると慢性のモルヒネ中毒を來すことあれば注意せねばならぬ。次に痲醉劑殊に抱水クロラル、スルフオナール等を內服せしめる醫士もあるが、姑息的療法たるを免れぬ。右の如くに色々手を盡くしても治らぬ所の重症に在つては外科治療即ち神經を切

斷することが肝要だ。斯くて一旦治療したる者は體操、登山、散歩等の運動を勵行し、滋養の食物を攝り、精神の過勞を避け身體を強壯ならしめ、其の病源に對する抵抗力を養成することが肝要である。尙右に揭げたる藥物の處方を示せば、

亞砒酸(毒) 〇・〇〇一五
還元鐵 〇・二
甘草末 適宜

右三丸と爲し一日三回食後一丸宛 但し亞砒酸は漸次增量の必要がある

右は變質强壯の目的に向つて用ふるのである。

水 一〇〇・〇
ブロームカリウム 六・〇
アマラ丁幾 二・〇
單舍 八・〇

右一日三回乃至六回分服

ブロームカリウム 五・〇

アセトアニリード(劇)　一・二
乳糖　適宜
右分三包一日三回食後一包宛

撒里矢爾酸曹達　四・〇
薄荷水　三〇・〇
單舍　八・〇
水　七〇・〇
右一日三回分服

フエナセチン(劇)　二・〇
乳糖　適宜
右分三包一日三回一包宛

抱水クロラル(劇)　〇・五
乃至　一・〇
單舍　五・〇
アラビアゴム漿　二五・〇
右發作時に頓服

右何れの處方も前々から其の効能を述べてあるから、其の取捨選擇は自から解るであらう。

偏頭痛

須磨子二十三歳は十九歳の時、親の意見も肯かず、俳優中村菊助と自由結婚をした。偖、連れ添つて見ると想像してゐたとは大いに違ひ、夫の菊助は不品行で情愛が薄くて而も生活難と來たら實に甚いものだ。さらでだに母の神經質を遺傳してる須磨子の氣苦勞と云つたら一通りで無い菊助は外で色々の滋養物も食べようけれど、家族は全で香物ばかりの副食物、搗て、加へて幼少から月經不順に便秘症の須磨子であるから堪らない、益々貧血になつて毎日〳〵鬱々として暮してゐたが、次第に身體が懶く食慾は大いに減り、感情は鋭くなつて腹ばかり立てゝゐたが、其の揚句に頭の左側に破れる樣な劇しい頭痛がして嘔吐を催し、何とも言へぬ苦しさを感

じる所から醫士を招いて診て貰ひ、兩三日治療を受けたればそれでも頭痛は止んだ。斯て五六日も經つと又もや劇しい頭痛、又診て貰へば又一日位で治つたが、それからと云ふものは時々治つたり發つたり、又一日の中でも恰當村時雨の如くに降りみ降らずみ否發つたり發らなんだりして、其の發る時は痛い方の顏面が紅くなつて熱る、斯て段々月日が經ては經つ程甚だしく疲れて、眼には燦爛とした光線が見えたり耳が鳴つたり、時偶には片方の眼だけしか視えぬことさへもある。斯うなると夫の菊助は我家へは歸らぬ稀に歸ることが有つても、我儘病だとか怠惰病だとかと言つて口汚く誹つては又出て行つて了ふ。須磨子は夫に隱して有つてゐた貯金も使ひ、衣類や指輪までも賣つて醫療に費したが、病氣は行きつ戻りつしてゐて一向に埒が明かぬ。「嗚呼兩親に背いて不義な結婚をしたから罰が當つたのだ、儘よ死なうか知らん」と潸然泣いてる所へ、便つて來たは誰あらう、戀しい〳〵母である。須磨子は驚くやら嬉しいやら、恥かしいやら、何とも言ひ樣無く

唯泣くばかりだ。母も手巾眼に當て、『お前の友達の芳子さんから、お前が酷い目に遇つてるといふことを聞いて、お父樣に隱れて來たのだ、人別が入つてるといふ譯では無いし歸つたが宜からう、それに附いては芳子さんを今晩此家へ遣すから一緒に來なさい』……

* * * *

須磨子は溫かい情の籠つてる兩親の許で、神經系の病が得意といふドクトル富士登山先生を招待して治療に取り掛つた。ドクトルが施した療法の大要を述べると斯うだ、其の頭痛の發る時には充分に身體を靜にし、溫脚浴を取らしめ頭部に依的兒を滴し、或は又冷頭せしめることもあつた。又電氣療法及び按摩療法も試みた、それから海水浴も實行せしめ又下半身を溫湯に浴しつゝ、上半身の冷水灌注も行らしめたが、之は非常に偉効が有つたと本人は今に喜んでゐる。それから飲食物は易化滋養の物を

選びて攝らせ酒は勿論、茶や珈琲の如き興奮性の飲料は一切避けしめた。それからドクトルは運動を勵行せしめた、先づ運動法として家の內外の拭掃除特に庭園の草取、打水又風呂の水汲、後には鐵啞鈴體操や挽弓を行らせ、餘程健康に赴いて來た時には擊劍柔道までも稽古せしめた、兩親が『女には不相應で御座いませぬか』と問へば『色男金と力は無かりけり』といふ句がありますでせう、之は女にも當嵌り「色女金と力は無かりけり」です、ハア〳〵、斯る積極的の衞生も人に依つては勵行せしめねばなりません』と答ふ。須磨子も嬌冶けた男に懲々してる事とて、女の身でありながら喜んで斯る武的の練習をすること一年餘、腕力大いに附き筋肉は引き締つて發達し、精神は爽快に無邪氣になつて非常に健康な身となり、再び良緣あつて今度は富有な實業家と正式の結婚をした。話は元へ戻るがドクトルの處方錄を見せて貰つたれば左の通りである。

(1)フエナセチン(劇)　二・〇
乳糖　一・五

右分三包一日三回一包

(2)アセトアニリード(劇)　三・〇
臭剝　一・〇
乳糖　一・五
右分三包一日三回一包

(3)安知必林(劇)　一・五
臭剝　三・〇
苦丁　一・五
單舍　一〇・〇
水　一〇〇・〇
右一日三回分服

(4)ノイロフエブリン　一・五
乳糖　適宜
右分三包一日三回一包

(5)珈琲涅(劇)　〇・一
赤葡萄酒　一五・〇
單舍　八・〇
水　一〇〇・〇
右一日三回分服

(3)亞砒酸(毒)　〇・〇〇一五
還元鐵　〇・二
甘草末　適宜

右六丸と爲し、一日三回食後二丸宛

(7) 印度大麻越幾斯(劇) 〇・一

ヒヨス越幾斯(劇) 〇・一五

甘草末 適宜

右九丸と爲し、一日三回三丸宛

(8) 亞硝酸亞密兒(劇) 三滴乃至五滴

右布片に滴し吸入

(9) 溶製エルゴチン(劇) 一・〇

蒸餾水 四・〇

右は五回乃至十回分にして一回に半筒乃至一筒皮下注射

(10) メタヴアナヂン酸ナトリウム(劇) 〇・〇四

蒸餾水 一六〇・〇

右四・〇宛一日二回乃至三回食前に與へ、一週間中に二日乃至三日程用ふ。

右處方の説明を尋ねたら斯う答へた。曰く、(1)は鎭痛の目的、(2)(3)(4)は鎭痛に鎭靜を兼ねたるもの、特に(4)はノイロナールとアンチフエブリンとの合劑であつて新藥に屬してゐる。換言すれば(1)より(4)までは同性質の藥ではあるが、一藥を餘り長く連服せしめると副作用即ち中毒の憂ひがあるから、轉々交互に換て用ひたのです、(5)は偏頭痛、神經痛に一時的效力を奏する所から頭痛の劇しい折に一二日乃至二三日用ひたが連服は宜しくありませぬ。(6)は變質强壯劑として頗る長く持長しました。7の印度大麻及びヒヨスの二劑は共に鎭痛鎭靜の作用があるから玆に合劑として右(1)より(4)までの藥を中止したる場合に用ひたのです。(8)は偏頭痛が痙攣性に來た場合に吸入せしめると一時的ではあるが頗る良效有つたです。(9)は痛む方の顏面が紅くなつて顳顬動脈(俗にコメカミの方に在る脈)が高く搏ち瞳孔が小さくなつた場合即ち痲痺性に來た時用ひたので、(10)は貧血や癒やし、且神經强壯藥として應用したのです、頗る良效はあつたと信じま

すが餘り連服せしめることの出來ぬのが此の藥の短所です云々。

＊　＊　＊　＊

其の後中村菊助は須磨子の出世を聞いて尋れ行き、己の女房だなど、無心を言つたが、須磨子は『妾が應接して遣りませう』と菊助を見るや否や、柔道で、グウの音も出ぬやうに締め、『今度は命だけ助けて上げます、此後來ると締め殺して了ふ、不服があつたら警察に屆けなさい』と突き放したれば這々の體で逃て行つたとは氣味の宜い話である。

癩　癇

醫學博士兩山邦良と某紳士とは至極懇意な中で而も共に遊獵が好な所から雪の降り積る寒い日をも構はず、鐵砲擔いで或る田舍の郊外に出で何か好い獲物をがなと探してゐたが、紳士は餓に小踊して、確に彼は雁で有ら

うと今や火蓋を切らんとする一刹那、博士は『マ、待ち玉へ、彼は人間であらう、人間が凍死してゐるのか、それとも何かの病で人事不省になつてゐるのであらう、雁としては大きいやうだ』『では、一つ、丸の當らぬ樣に上の方を打つて見よう』ドーン『それ見玉へ逃げぬだらう』是に於て兩人は足を早めて行き見れば、成程人間だ、死んでは居らぬが上下の齒を緊しく合せ、軀幹を弓狀に反らし、四肢を伸ばし、指は屈げて內に折り、拇指を覆ひ、口角から泡を出し尿を洩らしてゐる。『之は間違も無く癲癇だ、人品から察すると紳士に相違無い此處に放棄つて置くは不憫である、何れかの人家へ連れて行かねばなるまい……』斯う言つてる矢先へ通り掛つた農夫二人を呼び留め五六町先の掛茶屋まで運ばせた。濡れてる着物を靜に着換させ圍爐裏の側に寢かせて置くと暫時にして昏睡狀態が止み、四邊を見廻し、『やア持病の癲癇が起つたのか、之は皆樣に御厄介掛けたのですなア』紳士は前からの始末を語ると、患者は大いに喜び同じく都人のことなれば、三人同道して歸

京し、博士の友人なる神經系病專門なる切博士に診療を受けた、切博士曰く、『貴方は陸軍砲工學校で英語を教授してゐられる文學上との事だか、兎に角心身の過勞を禁じ悠々自適以て一生を送るの策を講ぜればなりません。戟刺の多い外交的の事は避けるが宜いです、身體の運動も逍遙散歩位に止めておかねばなりません。酒は勿論茶や珈琲も成可避けて喫煙も出來得可くば止め、食物は淡泊とした物を選び、動物性の食物は始ど廢し少量の牛乳を飲む外は先づ禪坊主的が宜いです。住地は夏ば山地に靜養し冬は溫暖なる海濱に居り、房事も大いに少くすることが肝要です』と次の如き處方を書いて呉れた。

(1) ブロームカリウム　四・〇
重炭酸ナトリウム　一・五
單舍　一〇・〇
水　一二〇・〇
右一日三回分服

(2) ブロームカリウム　一〇・〇

苦丁　二・〇
單舍　一五・〇
水　一五〇・〇
右一日三回分服

(3) 纈草根浸（八・〇）　一五〇・〇
林檎鐵丁幾　三・〇
單舍　八・〇
右一日三回分服

(4) 燐酸亞鉛（劇）　〇・五
白糖　適宜
右分四包一日三回乃至四回一包宛

(5) ブロマリン　乃至　六・〇
苦丁　一〇・〇
單舍　一・五
水　八・〇　一〇〇・〇
右一日三回分服

ブロームカリウムは本病の特效藥で、其の用量は最初は一日量四・〇位で、之より五・〇—六・〇—七・〇—八・〇—九・〇—一〇・〇の大量に至り

而も大量の水劑となす方が連服しても左程に胃を傷めぬものだ。併しブロームカリウムは時々休藥して用ふるが肝要だ、然うで無いと其の中毒の爲に口中が臭くなつたり、筋肉の疲勞を招いたり、其の他色々の故障が起るものだ、故に其の休藥中は纈草根などを代用するのである。(4)は本病に對し、無上の良い新藥であると誇大に冒ふ醫士もあるが、それ程までに效かぬにしても、良藥には相違無いから試みた方が可い。(5)も新藥でブロームカリウムの代用品である、矢張最初は少量で、順次大量にするが宜い、連服して中毒の來るはブロームカリウムと同じである。別剌敦那、アトロヒネ、酸化亞鉛などを用ふる醫士もあるけれど效の無いものと著者は信じてゐる、併し後の處方一束中には此等の處方が出てゐる。藥物外には尙平流電氣を通じたり、或は冷水療法も試みればならぬ。冷水療法は朝夕或は臨臥に如露仕掛の雨浴を行ひ身體を摩擦するのである。以上は發つた後の療法であるが、偖愈發らうとする時の豫防法は如何といふに、之は

放棄つて置いても大抵差支無いものだ。患者に依ては自分の經驗で自分が之を豫防する者もある。例へば肢體を緊しく縛るとか或は强く摩擦するなどである。又醫家に依つては大量の食鹽を嚥み下すと其の發作を止めることが出來ると言つてる人もある。又愈々發つた初期に亞硝酸アミールを嗅がしめれば往々有益なことがある。

顏面神經麻痺

旅俳優磯山和夫は汽車に乘る際、何時も窓を開いて長い時間方々の景色を眺めてるが癖の爲か、それとも有鉛白鉛の中毒の爲か、それとも梅毒に罹つた爲か、或は二因も三因も合併した爲か右の顏面神經が痲痺し、其の半面は弛んで患側の皺は自から消え失せ、眼からは涙がタラ〳〵と流れ、口角は下に垂れて唾は自然に溢れ、而して笑はうとしたり、談話をしたりしようとすると尙更右の症候が甚だしくなる。俳優の身として之では甚だ不都

合なる所から醫療を乞へば、醫士は先づ梅毒の治療をなし、又電氣療法も施し按擦もせよと命じた。内服藥は凡て無效だからとて次の處置をした

ストリキニーネ（粉）〇・〇一
蒸餾水　一・〇
右一週に三四回、一回に四分の一筒乃至二分の一筒皮下注射

發胞膏　〇・五
右局部に塗擦

されども、一向に效目無く、病は益募り口唇の運動が不完全になり言語も自由にならず、食物の咀嚼も甚だ不自由となり、舌の前方三分の二程は味覺が妨げられ、何うも治らぬ。醫士に此の事を喇すと、醫士は『醫藥も用ひ、傍禁厭をして貰つた方が可い、俺の知つた坊樣を世話して上げませう』早速之に從つて何某寺に行くと、壇上を設けたる嚴かな室に入れ、妙な帽を冠り、錦の衣着たる老僧出來り、抹香を焚いて佛前に祈つた

併優は何とも言へぬ有難さを感じ、三四日通ひ、尙右の治療も受けてゐたれば、次第に治つて了つた。後で或る者が其の醫士に向ひ、『先生は日新文明の學問をしながら禁厭などを勸めるとは可笑しいぢやありませぬか』と詰つたれば、醫士笑つて曰く『彼は信用療法とて歐米各國でも行つてゐます僕は心身の關係を利用しのです』と答へたさうである。

常習頭痛

江上きよ子は雜誌や新聞の上で、文學士鈴木如月の人と爲りを慕ひ、顏は知らぬが娘心に戀した。兩親も其の人の筆を愛してること〻て、此の人なら娘を遣つても可からうと思つてゐた所が茲に又、同姓名で幾分か小說作る眞似もする墮落書生が此の事を聞き込み、財產の有るを當に、慾と戀との二道から或る者を媒介とし、結婚を申し込んだ。神ならぬきよ子は此の奸惡を知る由も無ければ願つたり叶つたり、早速黃道吉日を選んで結婚し

たが、思つてゐたとは全で違ひ、借金は山の如くあるし、學問ときたらきよ子よりも劣つてる位、偖も不思議と疑ひつゝ、面白からぬ月日を送つてること茲に二月、或る日の事、故家に歸り、父と共に鬱晴しにと臥龍梅を觀に行き業平橋から龜井戸へ船に乘つた所が、同じく乘船してる紳士五六人色々と文學上の話をしてる中に、類と鈴木如月君と呼ぶ、きよ子は、えも言へぬ感こ打たれて、鈴木如月といふ人を能々見れば啻に容貌の閑雅なるばかりで無く自から威嚴があり何と無く慕はしい、父も同じく若や此の人が眞の鈴木如月では無からうかと思つた所から、『唐突にお尋ぬするは甚だ失禮ですが、貴方は新聞や雜誌に何時も小説をお書きになる御方ではありませぬか』と問へば『然うです』と答ふ。話を手取早く言ふが、之よりきよ子父子は歸宅して段々探究すると、姓名は同じだが、文學士では無く、全くの墮落書生と解り、告訴の手續にも及ばうとしたが、自分等の恥にもなることなれば、一札の謝罪狀を取つて離婚して了つた。乃できよ子の父は、

何うか眞の如月と結婚せしめんものと、人を以て結婚を申し込めば、先方も早速承知した。此の時以前の事を打ち明ければよかつたものを、再緣と言つては先方が承知せぬと云ふ推量から、全で初婚の如く裝つて結婚したが之が禍の種、否病の源となつたのである。眞の鈴木如月は申分の無い善い人であればある程、良心に責められる搗て加へて何うも姙娠三ケ月のやうだ、故家に歸り私に某醫の診察を乞へば姙娠に相違無いとの事、之からといふものは頭痛がして、仕頭痛は前額或は顏面時としては後頭、時としては頭部全體、或は又其の他の部に限局することもある。其の痛さは破裂するが如く或は鑽るが如き劇烈なこともあるけれど大抵の場合は左程に強く無くて單に頭部が重い。食慾は非常に減つて精神は鬱々し物事に感激し易く、而して針仕事するも懶くて出來ぬ。彼是してる中に腹は益膨れて來る、今にも夫に打ち明けようかと思へども、若し打ち明けたら正しい氣象の夫は必ず見捨て玉ふに相違無いと思へば打ち明けることは出來ぬ。

こ、是に於て母と相談し、故家の別莊に靜養するを名とし、此處にて面白からぬ月日を送り、遂に此處にて女兒を分娩し、或る漁夫に養育料を添へて養女とした。三四ケ月經てから、何食はぬ顏で夫の家に歸つた。されど頭痛は尙も止まず、義俠の心に富んだ優しい夫の侍遇には尙も良心の呵責に堪へぬ。屢醫療も受けたが、或る時は頭痛も幾分か止むことあれど、それは唯一時的で、矢張元の默阿彌。斯くて憂い月日を送ること茲に四年。夫の如月は『きよ子さんは何うも神經質で困る、僕と一緒に旅行でもしたら可からう』との事、之に否むこともならず、時は八月の盛夏信州は上諏訪の溫泉場湖水に最も近くて景色の最も宜いといふ若松館に逗留することになつた。大抵の場合には夫と共に散步するのであるが、今日は東京へ原稿を送られればならぬから、きよさん一人で散步しなさいとの言葉、きよ子は町に行き買物をし、ソロ〳〵歸つて來る途中、豈圖らんや先夫の如月は四五歲になる愛らしいお河童頭の女兒を抱いてるにピツタリと遇つた。『きよ子さん然う驚くに

も及ばんでせう、貴女は此の兒の母です……』『エ、……』と叫んだが、其の儘氣絕。眞の如月は原稿も書き終り、妻を迎へ旁同じく散步に出懸ると、此の始末に出逢ひ、如月同志で助け來り、水よ藥よと漸く氣が附き、扨之から先夫如月の物語を聞くと、其の大要は左の通りである、『僕も善心に立ち歸り正道を履行するやうになり、過日も漁夫の家を尋ねて此の兒を受取り、實母が此の土地に居ますから、育てて貰はんが爲に歸省したれば圖らずきよ子さんに遇つた云々』きよ子は潛然と泣いて爾來の罪を謝る。義俠の如月大いに怒るかと思ひの外『きよさんは打ちあけなんだか水臭いけれど、元々我を愛した結果、欺かれたので心は正しいのだされば今、如月君の立身せられるまで、僕の家に其兒を引き取り、眞の母が育てた力が可からう。それとも、きよさんは子まで有ることなれば、先夫の如月君と再び結婚せられるか、然る場合に於ては僕快よく媒介の勞を取らう云云』先夫の如月は大に感泣し、實に有難い仰せ、併しきよさんを欺いて一身を汚さしめた身

何の面目あつて、きよさんと結婚出來ませう、決して未練は有りませぬ』之にて話は纏り、きよ子は良心の呵責を免れることになつた。話變つて著者糸左近も家族を伴れて同じ宿屋に湯治してゐた所から、如月夫婦を知り、遂に處方箋を與へて此の常習頭痛病を療治した。若し此の婦人が多血家であるならば淡泊なる食餌を勧めて運動を專一になさしめるのであるが、貧血性であつたから、湖水の鯉鮒を始めとして牛鳥肉、雞卵綠菜などの滋養食物を攝らしめ下半身の溫泉浴に上半身の冷水灌注を施し、運動は逍遙散歩位に止め、內服藥としては

(1) アセトアニリード(劇)

臭剝	一・〇
乳糖	三・〇
適宜	

右分三包一日三回一包

(2) フエナセチン(劇)

含糖ペプシン	二・〇
	三・〇

右分三包一日三回一包

(3) 安知必林(劇)

重炭酸ナトリウム	二・〇
單舍	三・〇
水	八・〇
	一〇〇・〇

右一日三回分服

(4) 還元鐵

鹽酸キニーネ	〇・二
甘草末	〇・一
適宜	

右九丸となし、一日三回食後三丸宛

(5) 法列兒水(等)

杏仁水(劇)	六滴
單舍	四・〇
水	八・〇
	一〇〇・〇

右一日三回分服

(1)(2)(3)は前々幾度も書いた鎭痛藥、(4)は强壯劑(5)は變質强壯劑、それで(1)(2)(3)は其の中毒を免れぬ爲に轉々交互に與へ、偖ら(4)又は(5)を用ひたのだ、而して(5)は最初は漸次增量したが、餘り連服出來ぬ藥なれば、後

に(4)に變へたのである著者は三月程同宿してゐたが、きよ子の病氣も非常に宜くなつて殆ど頭痛も起らぬやうになつたが、其の後は何うなつたか、今は何うしてゐるか、音信は無い。

書痙

石崎眞は宮內省の屋官吏で、僅の俸給を頂いてることが滿二十年、淘汰に逢つて休職、「我口を糊する道に困じ果涙ながらも筆の耕し」朝から晩まで無暗矢鱈に筆耕を行つてゐたが、拇指、示指、中指の三指が痙攣し、其の筋肉は强直るやうになつて迚も字は書けぬ。醫士の診療を乞はんには診察料が無い。乃で「處方と調劑術」を借讀したれば左の通り書いてある。

書痙病は一種の神經病であつて、之に罹つたら治るまで寫字を止め、指を按摩し冷水を點滴し左の處方藥を塗けよ云云。

的列並底油　一〇・〇—　阿列布油　二〇・〇

右二品混和一日數回塗布

早速試みたれば四五日で治つた。

横隔膜痙攣　俗に云ふしやくり

直子夫人は常に胃腸の幾分病いのが原因でもあらうか、時々吃逆をする今日は四五人集つて歌留多を行り「逢ひ見ての後の心に比ぶれば、ケツリ、「戀すてふ我が名は」ケツリ、「大江山」ケツリ、『直子さん、それでは苦しいでせう、紙捻を鼻孔にお入れ遊ばせ』直子は後を向いて入れる、ハクション、成程治つて一時間ばかりは何の苦も無く「百數や舊き軒端の」ケツリ、主婦のきく子夫人は『今直子さん赤樣が大變お病くなつたさうですッて』『エヽ』と立ち上る。『吃逆は治りましたか』『治りましたが、左樣なら』吃逆を直さうと思つて、妾一寸貴女を驚かせましたのよ、何卒御免遊ばせ』直子

は怒ることもならず、其の儘行つてゐたが、又二時間程も經つと又々ケツリ策略上とは言ひながら、驚かされたのが氣持悪い所から、暇を告げて歸つたれど何うも治らぬ。醫士を招いて相談したれば、左の如き處方を呉れた

食鹽　一〇・〇　水　二〇〇・〇

右六分して毎三十分時に其の一分宛服用

服用し終つたれども、矢張治らぬ。醫士は色々と工夫して、遂に左の如き處方を順々に用ひ、三日間で遂々治つた。

依的兒製纈草丁幾　十滴

白糖　一・〇

右混和服用

横隔膜鎮靜の目的

莨菪越幾斯（劇）　〇・〇六

蒲公英越幾斯　〇・二

右三丸と爲し毎二時一丸宛

クレオソート（劇）　一滴

薄荷油　二滴

右膠嚢に入れ毎一時に

用ひて三四回服用　同上

ヤボランヂ葉煎（五・〇）　二〇〇・〇

右頓服

悪心嘔吐を發することあるもので、痙攣を鎮める上に於て、一時的の效を奏することがある。

杏仁水（劇）　四・〇　水　一〇〇・〇

鹽酸モルヒネ（毒）　〇・〇三

右一日六回分服

單舍　八・〇

これは麻醉劑であつて、吃逆に對しては殆ど奥の手と言つても差支は無からう。これで治らずばクロロホルムでも嗅ぐより外に仕方が無いと言つてはゐたが、それでも三回分程服むと漸く治り、遂々發らぬやうになつたが、身體は大いに疲れ、三四日は病人の樣に臥蓐してゐた。

右にて神經系病の著名なる者を說き終つたれば神經病の處力のみを一

纒に書く。されば右の外の神經系病に對しても左記中から應用せられたいものである。

神經系病處方一束

臭剝　一・五
白糖　適宜
右臨臥頓服　不眠症、淫情勃發等
抱水クロラル（劇）　〇・七
臭剝　一・〇
アラビアゴム漿　三〇・〇
單舍　五・〇

右頓服　催眠
纈草根浸（一〇・〇）　二〇〇・〇
臭剝　六・〇
單舍
右一日六回分服　神經諸病
纈草根浸（一〇・〇）　二〇〇・〇
林檎鐵丁幾　六・〇

單舍
右一日六回二日分服　八・〇
貧血を兼ねたるヒステリー症

右は二回分で、乃ち夜分其の半を與へ、其の後半時間を經て其の殘りを與ふ。（舞踏病、諸種の不眠症等）

ヒプナール　二・〇
橙皮舍利別　一〇・〇
餾水　五〇・〇
右用法同然　同上

ヒプナール　一・〇
白糖　適宜

ヒプナール　二・〇
餾水　六〇・〇

右一包量睡眠前一包乃至二包を與ふ　同上

バラールデヒット　三・〇
ゴム漿　六・〇
橙皮舍利別　三〇・〇
右臨臥頓服　神經性不眠

バラールデヒット　四・〇
橙皮舍利別　一〇・〇
水　一〇〇・〇
右一日三回分服　鎭靜の目的
抱水アミーレン　二・〇
單舍　五・〇
ゴム漿　三〇・〇
右臨臥頓服　催眠
抱水ブチールクロラール　一・〇
酒精　一〇・〇

屈里設林　二〇・〇
水　七〇・〇
右一日六回（毎二時）分服　神經痛、脊髓痨等
ウレタン　二・〇
橙皮舍利別　一五・〇
水　二五・〇
右頓服　麻醉
薄荷　各一・〇
グアヤコール（劇）
無水アルコール　一八・〇

右混合、筆にて塗擦　神經痛

萇菪越幾斯（劇）　四・〇
澱粉　七・〇
グリセリン　九〇・〇
右混和塗擦

鹽酸モルヒネ（劇）　〇・〇〇五
乃至　〇・〇一
白糖　〇・五
右一包と爲し頓服　麻醉
次硝酸蒼鉛　〇・三

鹽酸モルヒネ（劇）　〇・〇〇五
乃至　〇・〇一
適宜
白糖
右一包と爲し頓服　同上
次硝酸蒼鉛　〇・五
萇菪越幾斯（劇）　〇・〇二
乳糖　〇・五
右一包と爲し頓服　同上
次硝酸蒼鉛　〇・三
コデイン（劇）　〇・〇二
白糖　〇・五

右一包と爲し一日三回
一包 同上
纈草末 〇・二
樟腦 〇・二
メチーレンブラウ(劇) 〇・一
肉豆蔻 〇・〇五
右混和一包と爲し一日
二包宛 神經衰弱 性頭痛
臭素カリウム 二・〇
臭素ナトリウム 一・〇
臭素アンモニア 一・〇
苦丁 二・〇
單舍 一〇・〇
水 一〇〇・〇
右一日三回分服 神經諸病
阿魏丁幾 二・〇
ホフマン氏液 一・〇
纈草丁幾 四・〇
單舍 八・〇
水 一〇〇・〇
右混和一日三回分服 同上

纈草浸(一〇・〇) 一五〇・〇
桂皮舍利別 一〇・〇
カストル丁幾 〇・五
右一日四回分服 同上
臭素カリウム 三・〇
纈草末 一・五
ゲンチヤナ末 適宜
右分三包一日三回一包 同上
酸化亞鉛 〇・六
蕓苔越幾斯(劇) 〇・〇六
纈草末 一・〇
右九丸と爲し、一日三回三丸宛 癲癇等
イヒチオール 〇・三
珈琲涅(劇) 〇・一
フヱナセチン(劇) 二・〇
乳糖 適宜
右分三包一日三回一包 神經痛等
ウレタン 二・〇
橙皮舍利別 一五・〇

水　二五・〇
右頓服　麻醉

メチラール　二・〇
水　五〇・〇
單舍　一〇・〇
右頓服　鎮痛　催眠

メチラール　一〇・〇
豚脂　九〇・〇
右外用

抱水ゴチールクロラール（劇）　一・〇

酒精　一〇・〇
グリセリン　二〇・〇
水　七〇・〇
右一日六回分服

法列兒水（毒）　五滴
林檎鐵丁幾　二・〇
單舍　八・〇
水　一〇〇・〇
右一日三回食後分服
神經痛、舞踏病等

パラールデヒード　三・〇

ブランデー　五・〇
橙皮舍利別　八・〇
水　一〇〇・〇
右一日三回分服　鎮靜　鎮痛

スルフオナール（劇）　〇・五
乃至　一・〇
白糖　適宜
右頓服　麻醉

スルフオナール（劇）　〇・五
乃至　一・〇
臭素ナトリウム　一・〇

乳糖　適宜
右頓服　同上

クロロフオルム（劇）　一・〇
單舍　八・〇
薄荷水　二〇・〇
水　八〇・〇
右一日三回分服　麻醉　鎮痛

メチーレン青（劇）　〇・一
白糖　適宜
右一包と爲し一日三回　神經痛、其他鎮痛

抱水クロラール（劇）　〇・五
乃至　一・〇
臭素カリウム　一・〇
ゴム漿　二五・〇
單舍　五・〇

右頓服　催眠

トリオナール（劇）　〇・五
一・〇—一・五—二・〇

右頓服

催眠劑で若し效力無きときは二・〇まで用ふるのである。

ブロマリン　一〇・〇
右分十包毎日二包乃至
八包　癲癇

右一包と爲し一日三回
一包　同上、但し二日分連服は宜しからず

硫酸アトロピネ（毒）　〇・〇〇〇五
酸化亞鉛　〇・二
ヒヨス越幾斯（劇）　〇・一八
纈草末　三・〇

纈草油　一滴
右分三包一日三回一包　癲癇

硝酸銀（劇）　〇・五
泥菖根末　適宜
右五十丸と爲し一日二回二丸宛　同上

沃度カリウム（劇）　一・〇
苦丁　二・〇
單舍　八・〇
水　一〇〇・〇

右一日三回分服

梅毒性顏面神經痲痺

アスピリン　三・〇
白糖　適宜
右分六包一日三回一包

リウマチス性顏面神經痲痺

ザリピリン（劇）　一・〇
白糖　〇・五
右一包と爲し一日三回
一包宛　偏頭痛等

臭素酸コフイネ（劇）　六・〇

白糖　六・〇
右分十包朝夕一包宛　同上
拘櫞酸コフイネ　一・〇
フエナセチン（劇）　五・〇
白糖　三・〇
右十包と爲し朝夕一包　同上

ザロフエン　〇・五
乃至
右一包と爲し三包を與へ一日三回一包宛　同上

薄荷腦　一・〇
オレフ油　一・〇
ラノリン　一五・〇
右軟膏と爲し顳顬部に塗擦　同上

甘汞（劇）　一・〇
乳糖
右分三包朝夕一包宛　適宜

水蛭　五條　腦充血
右顳顬部又は耳後に貼

用　同上
芥子末　一〇・〇
微溫湯　二〇・〇
右粥狀にし布布に攤し腓腸筋に貼り、十分時位で灼熱ることを感じたら之を除く。

臭素カリウム　六・〇
龍膽丁幾　二・〇
單舍　一五・〇
水　二〇〇・〇

右一日三回二日分服
經衰弱等に用ふ
コロシント丁幾（劇）　一・五
阿魏丁幾　六・〇
單舍　一五・〇
水　二〇〇・〇

右一日三回二日分服　同上
萇菪越幾斯（劇）　一・〇
酸化亞鉛　五・〇
護謨末　適宜
右百丸と爲し一日三回

一丸乃至二丸宛、

抱水クロラール（劇）　〇・五

鹽酸モルヒネ（毒）　〇・〇〇五　至乃　一・〇

護謨漿　〇・〇一　至乃　二五・〇

單舍　八・〇

右頓服　不眠症

ピラミドン（劇）　一・〇

白糖　適宜

右分三包一日三回一包宛　神經痛、神經性頭痛、脊髓痨等

ヲフデルドック　各　一〇・〇

カンフル丁幾

右調和朝夕一回宛塗擦　神經痛等

バラールデヒット　一・〇

橙皮丁幾　乃至　二・〇

水　五・〇

右頓服　鬱憂症等の鎮痛劑　三〇・〇

サリチル酸ナトリウム　四・〇

苦丁　二・〇

水　一〇〇・〇

右一日三回乃至四回分服　脊髓炎等

四分の一筒とは皮下注射器の四分の一にして、右處方藥の四分の一に非ず故に四分の一筒には硝酸ストリキニーネを〇・〇〇〇五を含んでることになる。

蕃木鼈越幾斯（劇）　一・〇

甘草末　各適宜

甘草羔

硝酸ストリキニーネ（毒）　〇・〇二

蒸餾水　一〇・〇

右四分ノ一筒乃至一筒

皮下注射　同上

右五十丸と爲し、石松子末を衣とし一日三回

一丸宛、同上

次亞燐酸（劇）（五十%液）　一・五
　三滴乃至六滴
水　八・〇
　右一日三回分服
　　神經病者の興奮及び强壯劑　一〇〇・〇
苦丁　六〇・〇
單舍
水
　右一日三回分服
　　神經痛、ヒステリー、癲癇等
　　一滴乃至二滴
　右冷水に浮べて發作時に頓服　鎭痙
纈草酸エーテル
纈草酸アンモニウム（劇）　〇・三
アンチゼブシン（劇）　〇・一
白糖
　右分三包一日三回一包　適宜
　　鎭痛劑として頭痛症等
トリサール　一・二
白糖　適宜

右分二包朝夕一包宛　同上
ベンツォイグノール（劇）　一・五
乳糖　適宜
　右分三包一日三回一包
　　神經痛性の頭痛
抱水プロコール（劇）　〇・三
單舍　八・〇
水
　右一日三回分服　鎭痙及び催眠　一〇〇・〇
グリセリン燐酸キニーネ　〇・五
甘草末　適宜
　右九丸と爲し一日三回
　三丸宛
　　神經痛、神經衰弱等
ドルミオール　一・〇
　右膠囊に盛り頓服
　　不眠症特に神經衰弱者の催眠藥
グリセリン酸銻　〇・六
赤葡萄酒　一五・〇
單舍　八・〇

水　一〇〇・〇
右一日三回食後分服　神經衰弱及び重病恢復期

ブローニツケル（劇）　〇・二
苦丁　一・五
單舍　八・〇
水　一〇〇・〇
右一日二回分服　癲癇等不眠症

硫酸アトロヒネ（毒）　〇・〇二
エルゴチン　二・〇
甘草末　適宜
右三十丸と爲し一日三回一丸宛　震顫麻痺症等

鹽酸ヒヨスチン（劇）　〇・〇一
蒸餾水　一〇・〇
右三分一筒乃至半筒皮下注射　同上

ウラトリネ（毒）　〇・〇二
甘草末　各適宜
甘草羔
右四十丸と爲し朝夕二丸宛　同上

消化器氣病篇

胃痛

胃痙とも云ひ、俗に癪と稱へてゐる

此處は箱根の峠茶屋、六十路を二つ三つ越した位の老翁は『舊道を歩いて見るも亦一興ぢや』と口の中で呟きながら今し一碗の澁茶に咽を濕ほしてゐると、俄に起る持病の癪、胃に烈しい痛みが起り、其の痛みは胸から脊までも響き、手を顫はせ顏色を蒼くして、悶へ苦しんでゐる折柄偶々來合せたは凜々し相な青年、袖摺れ合ふも多少の緣、『何ぞ壓へて給べ』と縋れば、青年も見るに見兼ねての介抱。『やア御隆樣で快くなりました、して即今の妙藥は？』『え、それは斯ういふ處方です』

アスピリン　〇・五
右日本酒約一匁にて服用

と書いて渡し、『アスピリンは解熱藥にもなるし又鎭痛劑にもなります、而して酒類は麻醉性の物ですから矢張鎭痛の作用をなすのです。アスピリンの無い場合には酒丈でも大いに助かります。平素に酒の嗜な方ならば今少し多く飲んだ方が效きませう』實に有難う御座いました』と老翁は青年の出て行く後を見送つて『嗚呼末頼もしい若者ぢやのう』

右は素人療法の話であるが、醫士では左の如き處方を用ふ。

(1) 抱水クロラール (劇) 一・〇
護謨漿 二五・〇
單舍 五・〇
右頓服

(2) 次硝酸蒼鉛 三・〇
重炭酸ナトリウム 三・〇
鹽酸モルヒネ (毒) 〇・〇三
右分六包毎一時一包宛
乃至 〇・〇一
蒸餾水 一・〇

(3) 鹽酸モルヒネ (毒) 〇・〇〇五
乃至 〇・〇一
蒸餾水 一・〇

薄荷水 十五滴
單舍 二〇・〇
水 八・〇
右振蕩して之を三分し毎一時に其の一分を與ふ

(4) クロロフオルム (劇) 八〇・〇
右皮下注射

(5) 燐酸コデイン (劇) 〇・〇三
乃至 〇・〇六
乳糖 三・〇
右分六包毎一時一包宛

乃で(1)の抱水クロラールは麻醉鎭痙劑で中毒は少いか、(2)(3)のモルヒネ程に效は無い。(2)(3)はモルヒネが速效を奏するけれど中毒の憂ひがある。(4)及び(5)も各其の目的は同じだが、矢張(3)の皮下注射程には行かぬ。要するに其の採用方は患者の體質にも依るし、又醫士が臨機應變の匙加減に任せるとせう。

急性胃加太兒

高等學校の入學試驗も首尾能く合格と知れた甲乙二人の學生は、正宗一升牛肉二斤、葱若干を下宿屋の下婢に命じ、夜中まで飲む、食ふ、歌ふ、後には玉山倒れたりで、兩裸打ち脱いだる儘前後不覺。斯て夜も明けようとする頃、漸と二人は眼が醒めたけれど、何れも力脱けしたやうに倦く互に苦しさを感じてると、甲は何だか惡心がして窓近くへゲー〳〵、乙も矢張椽側でガー〳〵、腹は痛む、胸は苦しい。隣室なる醫科大學生襖開いて出來り、『君等は必ず斯うなるだらうと思つてゐたさ』と買ひに遣つた氷片を哺ませ、一方には

稀鹽酸	一・〇	水	二〇〇・〇
單合	一〇・〇		

の水劑を作つて少し宛適宜に服み玉へと甲生に與へ、それから

レゾルチン	〇・六	橙皮舍利別	一〇・〇
稀鹽酸	〇・五	水	二〇〇・〇

の水劑を六回に分けて服み玉へと乙生に與へた此の甲乙二人に違つた藥を與へる譯は、同じ清涼劑でも其の效否如何を試さうといふ醫學生の研究心である。斯て此の日の正午頃に宅診を終へて來た醫士某は

(1)重炭酸ナトリウム	三・〇	乳糖	適宜
水	二〇〇・〇	右分三包一日三回一包宛	
(2)硼酸セリウム(劇)	〇・三		

の處方を書いて去つた。此の重炭酸ナトリウム水は胃中を洗滌的に調へ

さす目的、蓚酸セリウムは胃痛及び嘔氣を鎭める爲である。

慢性胃加太兒

右二人の學生中、一人は之に懲りず、尙時々暴飲暴食をなしたる爲に慢性となり、胃部は幾分か膨れて重苦しく且つ張る感覺がし、舌には苔が生え、口內は臭く時々噯氣は出る、食慾は減る、精神鬱々し、勉强も思ふやうには出來ず級中でも中以下の人となつたで。早速懇意な醫士に診察を受けたれば、本病であるゝの事。醫士は言葉を續け、『酒は勿論醋の物・干物・脂肪類・貝類・蔬菜類を可成食べぬやうにし、三度の食事時間は嚴重に守り間食は煎餅一枚たりとも食べちや不可ません。凡て斯ういふ病は一に養生二に藥ですなア』と次の處方を與れ、『之を當分御飲みなさい而して一週間毎に必ず診察をして上げませう』

(1) 人工カルルス泉鹽　一五・〇　水　一〇〇・〇

右一日三回食前服

(2) 撒里矢爾酸　〇・一　含糖ペプシン　三・〇

右分三包一日三回食後一包

(1)は緩下劑であつて胃を洗ひ、(2)は防腐を兼ねて又食物の消化を良くせしめる爲である。斯くて右藥を二週間連服し、大いに快よくなつたれば醫士はさう長く下劑を用ふる譯には行かぬとて次の如き處方に變へた。

(1) ケンチヤナ丁幾　二・〇　稀鹽酸　一・〇　單舍　八・〇　水　一〇〇・〇

之は(1)は苦味健胃劑で、胃の弱きを挽回せん目的、(2)は消化を促し、食

右一日三回食前分服

(2) 含糖ペプシン　三・〇　ヂアスターゼ　〇・三

右分三包食後一包宛

慾を進めん爲である。元來ペプシンとヂアスターゼとは不合理の樣ではあるが實際に於ては效力がある。

酸性消化不良

或る素封家の一人息子は身分不相應な賤しい女に迷ひ、妻にと乞へど、親は許して呉れず、精神は鬱々する、自暴酒は飲む、運動はせず、グツタリ日を送つてると、身體は次第に力脫けし鈍い頭痛や腹痛はする、食慾は更に進まぬ、噯氣は出る、益悲觀的になつて『嗚呼此の世は厭だ』など口走つてゐる。兩親は非常に心配し、早速醫士の診察を乞ふと叮嚀に診察し、又胃液の檢査もしたる後『之は鬱憂が原因となり不運動飲酒などが誘因となつた酸性消化不良症です、乃て鬱憂が原因となつた事柄は僕は略知つてゐますから、治療の傍及ぶ限り說法もして見ませう』とて次の如き處方藥を投じ、尙崇高なる觀念を與へて賢婦を思ひ切らしめた。

重炭酸ナトリウム　三・〇
右分三包一日三回食後一包宛

薄荷油糖　適宜

右は、制酸の目的であるが、一週間程經つと大分快よくなつたやうに覺えるけれど尙噯氣が止まぬとの事、乃で更に、

サリチール酸ナトリウム　二・〇
薄荷水　二〇・〇
水　三・〇
右一日四回分服　一〇〇・〇

の處方に換へ、之も一週間程も連服せしめたる後更に又

次硝酸蒼鉛　一・五
重炭酸ナトリウム　三・〇
右分三包一日三回一包宛

とした、之はサリチール酸ナトリウムを連服すると嘔氣を催すやうなことが

あるから右の處方に換へたのだ。

胃擴張

一度幕の内にまで進んだ相撲取某は退隱したる後、閑散な身となつた所から朝は朝酒、夕は晩酌、人を訪へば飲み、客有れば勿論一日中でも盃を離さぬ。それで牛肉ならば三四斤、雜賞餅なら年齢の數だけ一度に平らげるといふやうに半年ばかり續けてゐると、胃部は段々重苦しくなり、食慾は減り、次第に嘈囃は出る多量の水や食物を吐く、吐いた後は暫時輕快を覺えるけれど、何か食物を攝れば又元の默阿彌。斯くて日を經るに從ひ、昔は三十貫有つたといふ體量も哀れ二十貫に過ぎぬやうになつた。流石の某も遂に胃腸病院に入院したれば、醫士は嚴重なる攝生を命じた。即ち幾分飢を感ぜしむる程に食物を少量にし、其の食物も細かに挫いた牛鷄の肉・粥・卵・淡泊とした魚の刺身位を、纖維性の野菜物は少しも與へず而

して毎日胃唧筒で胃を洗ひ、左の如き處方藥を與れた。

(1)人工カルルス泉鹽　一五・〇
水　一〇〇・〇
右一日三回食前毎に其の三分の一宛服用すべし

(2)重曹　三・〇
硝蒼　一・〇
ホミカ越幾斯(劇)　〇・〇八
乳糖
右分三包一日三回食後一包宛

(1)は緩下劑で胃を洗ふ目的、(2)は胃を健全にし、且つ筋の收縮を催させる爲である。

胃潰瘍

日露の戰役で名譽の討死をしたる某大尉の未亡人二十三歳は貧血性であつ

た上に憂世の辛酸を嘗めねでならぬ身となつた爲か、初めの中は食後胃痛氣味であつたが、後には其の痛みが次第に增すのみで無く、嘔吐を催し、鮮やかなる血液を交ふるに至つた。こは大變と醫士の診察を受けると、胃潰瘍であるとの診斷を下し、且曰く『極めて身體を安靜にし、決して臥蓐を離れぬやうにし、而して流動體の食物より外は決して用ひては不可ません、殊に二週間程が大切です。それから又胃部には熱い御飯を布で包んで當てて其の一分を早朝に、殘りを午前十時と午後四時頃とに分服す可してゐなさい』とて次の如き處方藥を轉々換て與へた、患者は醫士の訓戒を嚴重に守つたれば、頗る重症ではあつたが三ケ月程で全快した。

(1) 人工カルルス泉鹽　一五・〇
卵黃　一個
水
右一日三回即ち三分し

(2) 抱水クロラル(劇)

○・五乃至一・〇
單舍　五・〇
ゴム漿　二〇・〇
右臨臥に頓服

(3) 次硝酸蒼鉛　三・〇
重曹　三・〇
右分三包一日三回一包

(4) 硝酸銀(劇)　〇・〇三
グリスリン　一〇・〇
水　一〇〇・〇
右黑色の瓶に入れ一日三回分服

(5) クロロホルム(劇)　十五滴
薄荷水　二〇・〇
單舍　八・〇
水　八〇・〇
右一日三回分服

(6) 過クロール鐵液(劇)　六滴
桂皮水　一〇・〇
水　一〇〇・〇
右一日六回分服

(7)阿片(劇)　〇・〇三
白糖　一・〇
右分三包一日三回一包

(8)重曹　三・〇
鹽酸モルヒネ(毒)　〇・〇三
右分六包一日六回一包
沃度丁幾　十滴

(10)麥角エキス(劇)　〇・一
蒸餾水　四・〇
右四分して其の一分を一度に皮下注射

單舍水　八・〇
右一日六回分服　一〇〇・〇

(1)は胃液中に鹽酸の多過ぎるのを防ぎ且胃を洗ふの目的で、本病には仲々效の有るもの。(2)は胃痛を緩らげ、且安眠することが出來る等、これ亦本病には有用の藥品で、此の二品を二週間程も連服すると頗る良效を呈するものだ。(3)は胃中に壁を塗つたやうな工合にし、且又鹽酸の過多を

防ぐ效を奏す。(4)は潰瘍の治癒を促す爲(5)は麻醉藥であつて、胃の苦痛を輕減せしめる目的。(6)は收斂の作用あるもの。(7)は止血及び鎭痛。(8)は鎭痛及び鹽酸過多の防禦。(9)も收斂(10)は專ら止血の爲である。右の樣に處方を澤山列記してあるが、要するに醫士は臨機應變の匙加減を行らねばならぬ。

腸加太兒

某家に仲働きとなつてた女中お何は盆の十五日の晩から暇を貰ひ、十七日の朝までに歸れとの難有い主人の仰せ、早速我家へ驀直。「藪入に母の隱すや藥鍋」と誰やらが言づた通り、親といふは難有いもので、無い中からもそれ鮨、それ蕎麥加之に汁粉、饅頭、その揚句に咽喉が渴いて氷水と來たから堪まら無い。夜の明方になると烈しい腹痛がして、ゴロ〳〵〳〵と腹は鳴り、便意頻に催す、走つて厠に至れば、ザーと夕立の如くに糞便は水下

りに下る、之で濟んだかと思つて寢床に來れば又候腹痛に續いてゴロ〳〵又走つて洩らせば先刻程には多かられど今度は粘液を混ぜたやうな糞便が下る。又寢床に來れば又々同じく催す、又々通ふ。斯く幾度も通つてる中に裏急後重になつて思ふやうに便は下らぬが、其の苦しさは仲々一通りで無い。早速醫士の來診を乞へば、『これア急性の腸加答兒ぢや、今日一日は臥蓐にジッとしてゐて、而も飲食物を殆ど食べぬやうにし、咽が渇いたら含嗽位に止めて、明日も一日だけは矢張靜に居て、スープ、牛乳、粥汁、卵黄位より外は食べぬやうにし、セッセと御藥を服みなさい』お何は折角の樂しみも水の泡となり、主家へは二三日の猶豫を乞うて治療を受けたれば、一時全快して再び働けるやうになつたが、主家に歸てから又々食餌の攝生を怠つたれば、今度は慢性に變じ、己むを得ず長の暇を貰つて數月間其の治療を受けた。今其の醫士が最初から與へた藥は如何と其の處方錄を調べて見たら左の通りであつた。

(1) 蓖麻子油　乃至　一五・〇
右濃厚の茶又は葡萄酒　二〇・〇
に浮べて頓服

(2) 甘汞(劇)　乃至　〇・二
白糖　〇・五
右一包となし一日二回　適宜
服用

(3) 單寧酸　〇・二
次硝酸蒼鉛　三・〇

(4) 阿片末(劇)　〇・〇六
單寧酸　〇・三
白糖　三・〇
右分六包一日六回一包

(5) 醋酸鉛(劇)　〇・〇六
阿片末(劇)　〇・〇三
白糖　一・五
右分三包一日三回一包
宛

(6)硝酸銀　〇・一
沙列布漿　一〇〇・〇
右灌腸

(7)撒里矢爾酸蒼鉛　一・二
乳糖
右分三包一日三回一包　一・五

(8)格倫僕根浸(二・〇)　一〇〇・〇
生姜舍利別　一〇・〇
右一日三回分服　五〇・〇

(9)アラビアゴム漿　六・〇
阿仙藥丁幾　八・〇
單舍
水　一〇〇・〇
右一日三回分服

(10)ビスマール　〇・四五
白糖　適宜
右分三包一日三回一包

(11)タンニーゲン　二・四
乳糖　適宜
右分三包一日三回一包

(1)は一回乃至二回位用ふ可きもので、宿便を除く爲の下劑。(2)は之も亦下劑で而も防腐を兼てゐる。(3)は收斂劑で、專ら下痢を止める爲め。(4)(5)は止める藥の强い方。(6)は防腐收斂の爲に灌腸するので本病のみならず赤痢にも甚だ宜い(7)も防腐收斂。(8)は健胃を兼ての收斂。(9)は穩和なる收斂劑で、畢竟輕症の者や又は(4)(5)の如き處方を餘り長く續けられぬやうな時に服用せしめるのだ。(10)は最近の新藥で、頑固なる下痢に良效がある。(11)も新藥で、惡性の慢性腸炎、肺痨者の下痢、夏期下痢などに良效がある。用量は始めは〇・七五乃至一・〇を一日二回乃至三回宛、後には一日四回乃至六回とし、一回には〇・一位に減ぜねばならぬ。

便秘

某理學士は官途にも仕へず、學校の教師にもならず、朝から晩まで、一室に

籠つて一心不亂に眞理を叩き、且一大論文を書いてゐたこと茲に滿二年。常に謂へらく余は腦ばかりの使用で身體の運動をせぬこと故、消化の宜い滋養食物を少量に攝つて居られねばならぬとて、朝は牛乳一合とパン半斤、午食には粥と卵一個及び淡泊とした魚の刺身少量位、晩食には飯二椀と上等の牛鷄肉及び豆腐、湯葉の類を用ひ、夜は遲くまで起きてることとて濃厚なる茶をガブ〳〵飲んでゐた。所が便通は三日乃至五日に一度宛極めて硬いのを少量に洩すに過なかつた。それか有らぬか、食慾は次第に減り、頭痛はする、忍耐力は段々衰へ、書を讀み筆を執ることが倦く、從來の如く仕事は捗らず「チエッ何う怠惰なるッ」と自ら叱責しては見るものゝ矢張精神は鬱々として元氣衰へ、腹は張る、食慾は益減り、書を讀み筆を執ることは、毫も出來ぬやうになり流石勇氣ある學士も醫士の手に縋らねばならぬやうになつた。醫士曰く『貴君の考へられる滋養物は病人の滋養物で、健康者の滋養物では無い。畢竟するに貴君は病人の眞

似をしたから病人になつたのです。牛乳や生卵乃至は粥の如き流動體の物を取つてをれば殆ど腸を刺戟すること無く、其上血液は腦に多く灌がれ身體の運動といふことが無いから茲に胃腸は無氣力になつて遂に便秘を來し、便秘結果精神も鬱々し氣も不性になるものです、之より夜は飯術や桑術でも稽古して然る後入湯し、血液を下部に下すやうにせねばなりません。又食物も昆布や香の物、蒟蒻其の他纖維性の野菜物何でもドシ〳〵食べ腹部には冷水を灌いて摩擦し、積極的の術生を實行し玉へ、嗚呼好男子惜むらくは衛生法を知らずかねハア〳〵〳〵』斯くて左の如き藥を與へたれば後には非常な健康者となつて雄大なる論文を脱稿し博士の學位を得た。

(1) 舍利鹽　一五・〇　單舍　一〇・〇
稀鹽酸　七八滴　溫湯　一〇〇・〇

右能く溶解するを待ち
一日三回分服

(2)蘆薈末　〇・六
大黄末　一・五
甘草末　適宜

右十五丸と爲し一日三回五丸宛、

(3)大黄浸(三・〇)　一〇〇・〇
重曹　三・〇
苦丁　二・〇
單舍　一〇・〇

右一日六回分服

(4)グリスリン　一五・〇
右リスリン灌腸器で灌腸

(5)カスカロイド
右二粒乃至六粒を日哺頓服

(6)乳酸マグネシウム　三・〇
白糖　二・〇
右分三包一日三回一包

(7)フエノールフタレイン　二・五

脂肪カカオ汞(劇)　二・五
白糖　二・五
ワニリン糖　〇・二五
右錠子二十五個に作り
一回に一個乃至二個を與ふ

(8)エモヂン(劇)　〇・一
白糖　〇・五
右頓服

(1)は二三日用ふるに適し、(2)は一週間乃至人に依つては二週間も連服せしめて差支無い。(3)も胃病藥を兼ねて一週間至乃二週間も續けることがある。(4)は一二日用ふるに過ぎぬ。(5)は常習便秘の人に二粒宛位ならば數週間連服せしめても可い。(6)も穏和なる下劑だ。(7)は新藥で頑固なる常習便秘には適するけれど、腸を刺戟すること強くて爲に腹痛を來すのが本藥の缺點である。(8)は緩下劑で一二回用ふ可き新藥である。乃で素人が二三日試みようといふには(5)(6)などが適當してゐる。無暗に長く用ひて慢性

下痢になるやうな生兵法を行つては不可ませぬ。

盲腸炎

著者の知人に二人の盲腸炎持病者が有つて、何れも毎年殆ど定期的に侵される。甲は大酒家で今年四十九歳、四五年以前から始まり、乙は四十歳酒は殆ど用ひぬが、常に肥滿家で、之は二三年以前から始まつたのだ。何れも便秘性であつて其の發する時は甲は何の誘因も無く俄に盲腸部即ち右の下腹に疼痛を發し、其の感覺は非常に過敏で少し其の部に何か觸れると飛び立つやうに痛がる。乙は遠道でも歩いたとか、或は何か力業でもしたやうな場合に發し、其の痛がる工合が甲者程に甚だしく無いが、多少熱發をして惡心或は嘔吐を催して苦しむが常である乃で余の二人に對する療法は、何れも身體を嚴重に安靜ならしめ、流動體の食物を攝らしめる點は同いが、其の他は殆ど反對にせぬと效が無いことを實驗した。即ち甲者に

は下劑を與へ、而も石鹼水を灌腸し、其の痛む場所には冷罨法として氷囊を當てるが、乙者には却て收斂劑の阿片を與へ、其の痛む場所には糜粥溫罨法を施すことにしてゐる。若し此の二人に反對の處置を施すと其の結果は面白く無い。斯くて阿片の分量も其の時に依つて斟酌する。右の次第であるから二人は著者の如き藪醫を非常な名醫と信じてゐる。

甘汞（劇）　○・二
大黃末　○・五
白糖　○・五

右一包となし、一日二三回一包宛、

阿片（劇）　○・○一
乃至
白糖　○・○五

右一包と爲し毎二時乃至毎五時に一包宛

痔疾

親から讓つて貰つた巨萬の富を有し、宏壯な家に住まひ、立派な衣服を纏ひ、數多の僕婢を使ひ、それで子福者で何不自由といふことの無い某家の主人公は、朝から晩まで或は人と談笑し或は圍碁を樂しみ、山海の珍味に飽き、和洋の美酒に醉ひ、何の運動もせずに悠々日を送つてること數年。後には稍、胃病の樣になり又腰が痛んだりしてる揚句、便秘がして肛門に痛みを覺え、其の痛みが便通毎に增し、尋で豌豆位の痔核が出て、それが次第次第に膨れ、遂に鷄卵大にも達し出血を伴ふやうになつた。乃で某醫學博士に診て貰ふと、『痔には內痔核と外痔核とあるが、貴殿のは外痔核だ外科手術を施して根治せしめねばなりません』『外科手術は眞平御免です。』『それにしても注射位は我慢せねばなりません。何れにしても酒類。茶、珈琲、脂肪の多い物及び辛い物などの飲食物は嚴重に止め、勉めて運動し、鐵鑛泉に浴し、餘り痛みの烈しい場合には肛門に水蛭を貼けたり、氷で冷したりせねばなりません。』とて

硫黃華	三・〇	右三包と爲し一日三回一包
重酒石酸加催謨	二・〇	
白糖	適宜	
の藥を服ましめ、		
濃石炭酸(劇)	〇・五	右八乃至十滴を鉛直に注射(エドワルド氏注射法と云ふ)
グリスリン	二・五	

條蟲

著者が十七歲の時であつた。富山師範學校の小便所で卒倒し、約三四十分時は人事不省であつたが、氣が附いて見ると着物は小便だらけ、臭氣芬々たるものである、左程の苦痛も無いけれど、兎に角醫士の診察を乞へば腦貧血だらうとの不得要領なる言葉。其の後半年程經て北國の雪路を歩いてる

と尿意頻りに催し、乃で雪の中へ違刑罪を犯したまでは覺えてゐたが後は矢張前と同樣、即て冷たいのに驚いて起き上れば殆ど夢ハ覺めたる樣な心地、今度は前の經驗があるから左程に驚きもせず其儘放棄っておいた。それから十八歳十九歳の時にも年に一二度づゝ其の樣な事があつた。越えて二十一歳の時は東京であつたが、下宿屋の便所で尿を洩らさうといふ刹那にワツと大聲を擧げるや否や倒れた、倒れた本人よりも此の聲を聞いた人達は大に驚き、走せて其の場に至れば尚驚いた、直に醫士を招き來つた頃は本人は平氣の平左でゐる。但し其の醫士は上手に診察をした。曰く、『功經た條蟲が寄生してゐるのだ。察するに平生は食慾が或は減つたり、或は反對に進んだりし、而して下痢と便秘と交代し、其の他頭痛があつたり、鼻の孔や肛門が痒かつたり、精神に不安を感じたり、僅の運動で動悸が高ぶつたりするだらう』其の通りです、先生は實に偉い御方ですれ、して又何の原因からして斯樣な蟲が寄生したのでせう』此の蟲の卵を含んだ生肉或は半煮えの

肉を食べたからです』成程考へて見れば友達と牛の鋤燒を競爭して食べ半煮えでも何でも平げたことが幾度もあります』早速驅り盡して健康な青年になり、天晴勉學を行り玉へ』之より其の指圖に從ひ、先づ豫備療法として條蟲の通路を潤く爲め左の下劑を服んだ。

ヒマシ油　一五・〇

右濃厚の茶に浮べて頓服

斯くて二日間斷食し、唯其の間に蟲の厭がる物即ち葱及び蒜を少し宛食べたが腹が餓いて苦いことであつた。

綿馬エキス　三・〇

右丸と爲し頓服、後三十分時を經て又前のヒマ子油を服す

腹は次第に痛んでゐたが、即て便通があると條蟲は塊りの如くになつて出で、爾來大いに健康に復し、絶えて卒倒などの事は無い。右は昔小生の身

に施したる療法であるが、其の外にも殺蟲劑は幾らもある。今其の處方を二三示せば、

(1) 柘榴根皮　六〇・〇
（水四〇〇・〇を加へて二十四時間煎じ二〇〇・〇となし）
依的兒性綿馬越幾斯　二・〇
右三分して其一分を毎三十分時に一分宛服用
屈蘇花　一五・〇
乃至　二五・〇
右三分して一時間毎に一杯の葡萄酒に混じて用ふ

(3) カマラ　八・〇
乃至　一〇・〇
右二分し、オブラートに包み、毎三十分時に與ふ

(4) フイルマリン　〇・五
乃至　〇・七
右頓服

(1)は效力は無いではないけれど、迂遠である。(2)は(1)程に手數は無いが效力は薄い。(3)は頗る效力あるけれど、嘔氣を催すやうなことがある(4)は綿馬エキスより製方したる新藥で粉末になつてるのみならず、甚だ服み易くて都合が宜い日暮にヒマシ油を服み、翌朝フイルマリン〇・八五乃至一・〇をヒマシ油一〇・〇に溶解したる物半量を服み、半時間を經て更に殘りの半量を服み盡くし、尙九時頃にヒマシ油一〇・〇至乃二五・〇を與ふるのである。

蛔蟲

某家に蝶よ花よと育てゝゐる十歳の一人娘は左程不健康といふ程では無いが、時々腹痛があつたり、下痢したりして何と無く元氣の無い風をしてるので、之を醫士に相談すると、『或は蛔蟲が寄生てるのかも知れません』と糞便を顯微鏡で檢査した所が、其の卵子が非常に多く在るので早速次

の樣な處方を用ひ、豫防にとて親達一同も皆々服んだ所が一二疋乃至二三疋宛ゐたとのことであた。

珊篤寧（劇）　○・○三（十歳の娘は○・○一五）

甘汞（劇）　○・二（十歳の娘は○・一）

大黄末　○・三（十歳の娘は○・一）

白糖　○・五

右一包と爲し早朝頓服之を三日間朝毎に續け四日目には

ヒマシ油　一五・○（十歳の娘は七・○）

右葡萄酒或は濃厚の茶に浮べ頓服

右は蛔蟲の特效藥と云つてゐたものだが、往々效力を奏せぬこともあるので、近來は次の新藥を用ふるやうになつた。

サントニン酸ナトリウム（劇）　○・○一　乃至　○・○三五

右頓服（大人の量）

之はサントニーネよりも迅速且確實に效を奏するけれど、黄視症の如き中毒はサントニーネよりも強いから注意せねばならぬ。

十二指腸蟲

或る田舍の紳士は家に何不自由の無い身なれど近來に至り全身が貧血し、次第に衰弱し、呼吸が迫り、心臟の鼓動が高まり、頭痛がしたり、浮腫があつたりするので、近鄕近邊の醫士に診察を受けたが、或は結核の初期、或は心臟病、或は神經衰弱、或は胃腸病など十人十色で何うも身體は衰弱するばかりで何の效も無い。乃で遙々上京し、帝國醫科大學の醫學士某に診察を乞ふと、糞便檢査の上十二指腸蟲の爲だと云ふことで次

の如き處方藥を與れた。

綿馬エキス　三・〇
アラビアゴム漿　三〇・〇
薄荷油　一滴
單舍　一〇・〇
右三回に分ち一時毎に服用

田舍紳士は服むこと十數日、病は大いに快よく遂に勇んで歸鄉し大に此の事を吹聽すると、隣村の某も同じ症候の有る所から同じく上京して同醫學士の診察を乞へば、同じく本病とのことで、同じく此の處方を數日服用したれば、身體は大いに快復はしたれど、眼力は非常に衰へ遂に失明して了つた。茲に於て患者は大いに怒り損害賠償を裁判所に訴したが裁判官は、綿馬は連服すると失明症を發するにもせよ。連服せしめてはならぬとの法律も無く、又醫學士は別に失明させようといふ意志も勿論無く、且眼よりも大切な命を取り留てることなれば無罪である上の宣

告、乃で患者は敗訴に歸したけれど、爾來醫學士は不名譽の制裁を受けて世人の信用を缺いた。されば此の處方を連服してはならぬ。次に

チーモール　三・〇
右分六包一日六回一包　薄荷油糖　適宜

チモールも量を超えて連服すると胃腸炎を發して衰弱することがあるから注意せねばならぬ。

急性腹膜炎

某政黨の一人は反對黨の人と政事上の議論をし亂暴にも相手の腹部を力任せに足蹴にしたれば何ぞ堪まらんウンと仰向に倒れたが原因となり始めは左程に痛く無つたが、稍暫く經つと極めて劇しい痛みが全腹部に來り腹部は膨れ、其の膨れ方が腹部平等では無くて各腸管の境界が判然

と腹壁面に現はれてるやうになり、而して嘔吐を催し、脈搏は細く緩くなつて來た。蹴た當人は非常に驚いて其の亂行を悔い、早速醫士を迎へて、何卒治して下さいと頼んだ。醫士曰く『之は急性の腹膜炎を發したのです、本病の原因は色々あるが、兎に角手後れになつて居らぬから、多分治るでせう』とて先づ安靜に平臥せしめ、腹部には氷囊を載せてドシ〳〵冷し、又水蛭を貼けて血を吸はしめ、内服藥として

阿片末（劇）　○・一　白糖　適宜

右分十包毎一時一包宛

を與へたが、尚嘔吐は止まぬ。乃で又アイスクリームを飲ませ、

鹽酸コカイネ（劇）　○・二　白糖　五・○

右分五包毎二時一包

を投じた。所が今度は吃逆が出て仲々止まぬ。醫士は又

鹽酸モルヒネ（毒）　○・○三

苦扁桃水（劇）　四・○

舍　水　一〇〇・○

八・○

右一日六回分服

の水劑を服ましめ、斯くて第一日には食物を毫しも與へず、第二日目から流動物を少量に用ひ嚴重に身體を靜かにして加害者をして謝罪せしめ、精神を慰める樣に導いたれば、病は日一日と快方に赴き平癒し、起訴するほどの事も無く内濟で目出度〳〵となつた。

慢性及結核性腹膜炎

某男爵の夫人は卵巣病に罹り、腹部を切開して貰ひ、遂に危い命を取り止めたが今度は前門の虎を逃れて後門の狼とやらで、又々慢性腹膜炎になり、腹部は膨れ腹が重苦しくて時々腹痛を感じ、而も腹部は板の如

くに硬い。某ドクトル診察して曰く『結核性で無いのが不幸中の幸である けれど、滲出物は大量に在ることなれば治不治の如何に至つては斷言出來ませんが、兎に角第一に心身の安靜を計り新鮮なる空氣を呼吸し、食物は十分に體力を維持させるやう極めて消化し易くて吸收することの容易なる滋養品を取らねばなりません』と家人及び看護婦に指圖し、腹部にはプリスニツ氏溫罨法(濕布繃帶)を施し、便秘の折には灌腸し、下劑には阿片を投じ、左の處方藥を與へた。

沃度カリウム(劇) 一・五
苦丁 二・〇
單舍 八・〇
水 一〇〇・〇
右一日三回分服

或は又 沃度鐵舍利別 六・〇
苦丁 二・〇

單舍 八・〇
水 一〇〇・〇
右一日三回分服

に換へたりしたが、滲出物は依然減らぬので、今度は、

醋酸カリウム液 一〇・〇
ヂキタリス浸(劇)(〇・五) 一〇〇・〇
海葱醋蜜 一五・〇
右一日三回分服

の利尿劑にしたけれど、矢張効が無い、乃で又

ヂウレチン 三・〇
單舍 八・〇
薄荷水 一〇〇・〇
右一日六回分服(利尿劑)

に改めたが、滲出物は尙一層增すやうで迚も効力が見えぬ所から、他の醫學博士とも協議し、其の良人などにも相談して今度は外科の醫學博士を招

き、開腹術を行つて滲出物を排泄せしめ傍尙沃度劑强壯劑の內服藥を與へて榮養法及び攝生に注意したれば、年月は頗る長かつたが遂に萬死の中に一生を得、夫人始め家人の喜びは非常であつた。序に述べておくが、又腹部には左の如き處方藥を塗布することも肝要である而して轉々交互に試むべしだ。

沃度丁幾(劇) 一〇・〇
五倍子丁幾 五・〇
右混和塗布

水銀軟膏(劇)
右一錢大の量の塗布 一〇・〇

カリ石鹼 各 二五・〇
黃色ワゼリン
沃度フオルム 五・〇
右塗布

學者は大抵不運動勝のものか、或る漢學者某も常に閉戸先生である所から食慾進まぬ爲に其の刺戟物として唐辛を非常に好み、或は紅葉大根汁を下物に酒を飲んだり、或は唐辛の煮たのを副食物としたり、其の他芥子生姜すべて辛い物を好み、揚句に痔血が走るやうになると、之に懲りて數月も食べずにゐると、痔血は止まつたが、右の最も下の肋骨の部に壓へつけられるやうな感じに搗て〻加へて疼痛を覺え、頭痛がして精神は鬱々し、詰まらぬ事にも腹が立つといふ有樣。早速懇意な醫士の診察を乞へば、醫士は觸診打診などしたる末、『肝臟が非常に大きくなつてゐる、之は肝臟充血といふ病です何しろ淡泊とした食物を取り、酒は絕對的に不可ません、殊に力も大分衰へてるです。心身の安靜が肝要ですが』と右の季肋部にプリスニッ氏罨法を施し、水藥二瓶を與へた。

(1) ストロフハンツス丁幾(劇) 一・〇
苦丁 一・五

單舍　八・〇
水　一〇〇・〇

右一日三回食後分服、

(2)人工カルルス泉鹽　一五・〇
水　一〇〇・〇

右一日三回食前分服

右(1)は心力を強くする爲め、(2)は下劑である。下劑は習慣痔血の閉止或は月經閉止の爲に來つた肝臟充血には尙更効がある。尙又次の如き處方を投ずる人もある。

旃那葉浸　(四・〇)

水製大黃丁幾　一〇〇・〇
重炭酸ナトリウム　二五・〇
單舍　一〇・〇

右一日三回分服(下劑)

硫酸ナトリウム　一五・〇
クロールナトリウム　五・〇
重炭酸ナトリウム　三・〇
水　二〇〇・〇

右一日三回分服(下劑)

黃胆

某伯爵の殿は舊大名華族のことゝて浮世の艱苦といふ事は露知らず、唯我儘一方で暮してゐたが、或る時重いインフルエンザに罹り、三週間程は熱の爲に苦しめられ、看護婦や家人を叱つてゐた。所が愛妾お何は賤業婦の果として斯樣な陰氣な所に遊ばせ冒葉で暮さうよりはと何れかへ姿を隱して了つた。殿は、唇を嚙んで立腹した。然るに心身の關係は妙なもので今や治りかけて食慾も大分催してゐたにも拘らず、又候食慾は俄に減じ剩つさへ惡氣を催し、續いて皮膚には黃色を呈はし、ハンカチーフで拭けばハンカチーフまでが黃色に染ると云ふ始末。見る物は何でも黃色になつて見

え、眩暈はする、精神は鬱々する、少し眠つても譫語ばかり云ふ。侍醫は『これはインフルエンザと立腹との二原因よりして黃胆を發したのです、されば療治は、勿論ですが攝生も肝要です』と易化滋養の流動的食物のみを進め脂肪類は絶對的に禁じ、精神を慰さめるようにとの注意。乃で家來共は兎に角愛妾の方を探し來り表面謝罪らせて怒りを解き、內服藥としては、

(1) 大黃末　二・〇
重曹　三・〇
白糖
適宜
右分六包一日三回一包宛

(2) 撒曹　六・〇
薄荷水　一五・〇
單舍
水　一〇・〇
右一日三回二日分服　二〇〇・〇

右(1)は緩下を兼ねての健胃劑、(2)は解熱を兼ねての醱酵及び腐敗制止の作用がある　斯くて日を經て次第に癒え、或る人の諫めを納れて精神の修養を積

み愛妾を捨て正妻を迎へ、「正々何折路傍柳。堪ヘ愛中庭一樹梅」といふ風になつたれば、身體も亦健康になつたとのことだ。

消化器病處方一束

これにて口內病食道病(之は後に又述べよう)等を除くの外は消化器病中の著名なる者につき略述べ且各二三の處方例を掲げたが、尙單に消化器病の處方としては澤山あるから、今之を一纏めにして次に收めておく。

蒲公英越幾斯　三・〇
甘草末
適宜
右十五丸と爲し一日三回　食前五丸宛に常習便秘を兼ねたる症

パンクレチアン　一・〇
含糖ペプシン　三・〇
乳糖
適宜

右分三包一日三回一包宛

パンクレアチンは脂肪を消化し、含糖ペプシンは蛋白質を消化するもの。

重曹	一・〇
酒石酸	〇・九
白糖	二・〇

右一日三回食前分服（健胃劑）

胸のムカ〳〵するとき

苦味丁幾	二・〇
含糖ペプシン	三・〇
稀鹽酸	一・〇
單舍	八・〇
水	一〇〇・〇

古倫僕末	二・〇
次硝酸蒼鉛	一・五
乳糖	適宜

右分三包一日三回一包

古倫僕浸（二・〇）一〇〇・〇

橙皮舍利別 一〇・〇

右一日三回分服

右二方共に消化不良を兼ねたる下痢症に用ふ、

ババヨチン	〇・六
重曹	三・〇
乳糖	適宜

右分三包一日三回食後一包

消化不良・胃弱及び胃腸加答兒に重曹など〻伍用して効がある。

鹽酸オレキシン	〇・五
龍膽越幾斯	適宜

右十五丸と爲し一日二回午前十時頃と午後四時頃とに五丸宛大量のスープに浮べて服用

貧血、種々の衰弱を兼ねたる食慾缺乏症及び消化不良症に効がある

純製カワカワ越幾斯	〇・五
白糖	適宜

右分三包一日三回一包

慢性胃加太兒、消化不良特に胃痛に効を奏す。

乙斯蘭士苦　(三・〇)　單舍　三〇〇・〇

右一日六回分服　一〇・〇

健胃强壯、下痢、消化良等に用ひて効がある。

ゲンチヤナ越幾斯　二・〇　煆製マグネシア　一・〇

荷薄油糖　五・〇　大黃末　一・五

水　一〇〇・〇　茴香油糖　一・〇

右一日三回分服　無力性消化障害に

重曹　三・〇　右分三包一日三回一包

制酸を兼ねて又通利の目的

レゾルチン　〇・六　硝蒼　二・〇

重曹　三・〇　白糖　適宜

右分六包一日六回一包宛

胃中に瓦斯を生じ、爲に噯氣の出る場合急慢胃加太兒、靜止せざる嘔吐、腐敗性消化不良、船暈などに良効がある。

コンヂユランゴ皮煎　(二〇・〇)　一八〇・〇

稀鹽酸　一・〇

橙皮舍利別　二〇・〇

右一日六回分服　胃癌其他食慾缺乏等

括矢亞丁幾　三・〇　苦味丁幾　一・五

單舍　一〇・〇

水　一〇〇・〇

右一日三回分服　無力性消化不良

蘆薈葯刺巴丸

右一日三回朝夕二丸乃至四丸宛　常習便秘通經藥

小兒酸　乃至　〇・二　三歲位

白糖　乃至　〇・五　十歲

右を丸と爲し頓服　二・〇　以上　六七歲

適宜

小兒の緩下劑
制酸又下痢症

センナ浸（一〇・〇）一〇〇・〇

硫酸苦土　一五・〇

單舍

右一日三回分服　一〇・〇

藥刺巴末（劇）　一・〇

甘汞（劇）　乃至　三・〇

乳糖

右分三包一日三回一包　一・〇　適宜

藥刺巴脂　〇・一

藥刺巴末（劇）　一・〇

蘆薈越幾斯　〇・五

藥用石鹼

右三十丸と爲し一日三回五丸宛、　適宜

峻下劑

藥刺巴石鹼　〇・二

蘆薈末　〇・一

石松子末　適宜

右十丸と爲し朝夕五丸

常習便秘

大黃末　二・〇

大黃越幾斯　一・〇

萇若魃幾斯（劇）　〇・〇八

右二十丸と爲し一日二回朝夕五丸宛

普通の下痢

前者よりも尙一層の峻下劑

カスカラサグラダ錠

右一日二回朝夕二丸乃至四丸宛　常習便秘

大黃末　〇・五

蘆薈越幾斯　〇・一五

コロシント越幾斯（劇）　〇・〇二

大黃越幾斯　〇・二

右十五丸と爲し一日三回五丸宛

緩下劑で通便あれば止むべし

巴豆油（劇）　一滴

薄荷油糖　三・〇

右混和して四包に分ち
毎二時一包宛、非常なる峻下劑、通便あらば直ちに止む可し

硫酸カリウム　三・〇
重酒石酸カリウム　一〇・〇
單舍　一〇・〇
水　一〇〇・〇

右一日三回分服　熱性患者の下痢

マンナ　六〇・〇
大黄丁幾　一〇・〇
單舍　八・〇
水　一〇〇・〇

右一日二回朝夕分服　虚弱家の緩下劑

タマリンド　（一五・〇）
硫酸苦土　一五・〇
マンナ　一〇・〇
舍利別　五〇・〇

右一日三回分服　熱性患者脚氣患者の下劑

リシコール　五・〇
乃至　一五・〇

右牛乳・スープ・コーヒ・葡萄酒或は濃厚の茶に浮べて頓服

ヒマシ油を粉末にしたるもので、該油よりも服用し易い。一回若くは數回の通便に適す。

アペレイン錠　三錠乃至六錠

右頓服

價の高い新藥ではあるが、緩下劑で中毒が無く而も奏効する時間が速い歐米人は素人藥として賞用す。

乳酸マグネシウム　三・〇
白糖　適宜

右分三包、一日三回一包宛、常習便秘に連服しても差支の無き穏和なる下劑であるが、連服するには一回〇・五位が適當である。

醋酸鉛（劇）　〇・〇三
阿片末（劇）　〇・〇二
白糖　適宜
右分三包一日三回一包

下痢略血

重サリチール酸蒼鉛錠
右一日二回朝夕二個宛

收斂を兼ぬるに防腐及び醱酵制止の作用があるから、腸加太兒、胃加太兒、下痢等に良効の有る新藥である。

ビスマール　〇・六
右分三包一日三回一包宛
タノコール　一・〇　適宜
白糖

頑固なる下痢に用ふる新藥

ビスムトーゼ　一〇・〇
白糖　適宜
右分三包一日三回一包　一・五

腸加太兒、腸炎これも新藥

大腸加太兒、胃潰瘍、腸出血、虎列刺、赤痢などの收斂劑として頗る良効ある新藥である。

ピスモン　一・五
單舍　五・〇
水　一〇〇・〇
右一日三回分服

急性慢性の腸障害及び各種の消化不良に用ふ。硝着的の効があつて而も水劑となすことが出來るから、小兒の收斂劑としては便利である。

タンニーゲン　〇・七
乃至　一・〇
右一包となし一日二回乃至三回與ふ

急性慢性の腸炎、腸加太兒、肺結核者の下痢、チブス等に始め大量を與へ、後には一日四回乃至六回とし、一回に〇・五宛を減じ、急性症狀の末期まで續けても差支無い所の新藥である。

サレップ根浸　（二〇・〇）
一〇〇・〇
阿片丁幾（劇）　〇・五

單舍
右一日三回分服　腸加太兒下痢　八・〇

ドーフル散（劇）　〇・三

白糖
右分三包一日三回一包　適宜

（同上）

腸加太兒、慢性下痢などに應用す、而してカスカリラ丁幾は食慾を進め、消化不良にも幾分の効がある。

ラタニア根煎　（二・〇）

右一日三回二日分服　二〇〇・〇

阿片丁幾（劇）　〇・五
蕃木鼈丁幾（劇）　一・〇
カスカリラ丁幾　二・〇
單舍　八・〇
水　一〇〇・〇
右一日三回分服

阿片丁幾（劇）　一・〇
桂皮舍利別　一五・〇

強度の下痢に疝痛を兼ねるのに適す。此のラタニア根は強い收斂性のものである。

タンナルビン　二・〇
甘汞（劇）　〇・一
白糖
右分四包一日三回一包　適宜

タンナルビンは收斂劑で腸加太兒、慢性赤痢、肺痨家の下痢、小兒の夏期下痢等に用ふ。斯くて奏効不全なるときは一回二・〇一日量一〇・〇に至つても差支は無い。甘汞は防腐的に伍用するのであるが、久時連服の節は除かねばならぬ。

タンニン酸キニーネ　一・五
白糖
右分三包一日三回一包　適宜

タンニン酸キニーネは其の收斂作用が弱いけれど長く續き、且強壯劑としても幾分の効力があるから慢性下痢、肺痨者の盜汗、間歇熱に下痢